

【any%RTA】 UNDERTALE 『二人の地下世界』 モード 【自殺チャート】

Lesser

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このSSはUNDER TALEの（現実には存在しない架空の）協力モード：『二人の地下世界』モードを使ったMonster開放までのRTAとなります。

見ずらい文章注意。

（淫夢要素は）ないです。

▽レギュレーション▽（なぜかどこにもないので書いておきます）

- ・ 実際に二人プレイ可。
- ・ 計測開始はゲームスタートと同時に。
- ・ 計測終了はエンディング直前の操作不能時点。
- ・ %の判断基準はデート可能なキャラクターとのデート達成率。

改名しましたが中の人は元の通りです。旧名は黒鉄でした

目次

RTA—1	地下入場からクソ花との挨拶まで	1
RTA—2	パズルの道からマツマの説得まで	5
RTA—3	運ゲーすぎる戦闘から退場まで	9
Neutral—1	穴に落ちてからMonsterに助けられるまで	14
Neutral—2	分かりやすいパズルから二人つきりが始まるまで	18
Neutral—3	二人きりから戦闘準備まで	23
Neutral—4	戦闘開始から声をかけられるまで	29
Neutral—5	RTAパートが使えなくなるまで《Victim視点のみ》	33
Neutral—6	RTAパートが使えなくなるまで《八人目くんちゃん視点のみ》	38
Neutral—7	最後の戦いが始まる	44
Neutral—8	The final battle (最後の戦い)	48
Neutral—9	FINAL	54
Neutral—End	これでおわり?	58
Pacifist—1	まだ終われない	61
Pacifist—2	よりよい未来へ	64
Pacifist—3		67
Pacifist—4		71
Pacifist—5		73
Pacifist—6		76

P a c i f i s t 1 3	P a c i f i s t 1 2	P a c i f i s t 1 1	P a c i f i s t 1 0	P a c i f i s t 9	P a c i f i s t 8	P a c i f i s t 7
108	103	100	96	92	87	82

RTA—1 地下入場からクソ花との挨拶まで

皆さんどうもこんにちは！ 拙者は新人RTA走者でござる。ニンニン。

というわけで軽い自己紹介を終えたところで地下世界に蔓延るMonster達を救済するRTA、はーじまーるよー。

(ちなみに淫夢要素は) ないです。走者はホモガキですらないんでね。

今回は誰でも簡単に走れるチャート：俗に言う『自殺チャート』で逝きたいと思います。

このチャート、Asgoreに自分の死体かソウルを届けるだけでいいため基本的に自殺するタイミングを計るだけなんですよね。カントンそうでしょう？ 実際カントンなんですよ。

とまあそんな感じで簡単にチャートの説明をしたところでそろそろ走っていきましょう。

選択するモードは主人公である八人目のニンゲン(ネタバレを回避する走者の鏡)とは別人として地下世界に落ちる『一人の地下世界』です。これ基本協力モードなんですけど、なんとこのゲーム、自立可能なAIを搭載していて一人でも遊べます。ボツチにも優しいゲームですぜ、こいつは。

説明口調になりましたが計測開始地点はゲームのスタートボタンを押した瞬間から。計測終了はエンディング直前の操作不能時点となります。

それでは…イクゾー！（デッデッデデデ！カーン）

…まあ、まずは名前の設定なんですけどね。今回は入力速度と表示速度を吟味してHomom…と行きたいところですがここはあえてVictimビクティムとしましょう。

わざわざハンデを抱えるような行為に思えますが、このゲーム、意外と名前をもとにした性格になる気がするんですよ。というのも、この間まではホモのまままで試走していたのですが、妙にズニキに反応していたんですよ。逆にマツマヤスシネキのような女性キャラには

素っ気なかったです。

なので試しも兼ねつつ、今回は被害者、生贄という意味を持つ……
といいますか、生贄をゴードル先生に翻訳してもらって出てきたV i
c t i m という名前を使っています。その方が面白そうですね。
それでは名前を決めたところで”はい”を選択してタイムマース
ターゲット。

はい、OPが始まりましたね。プレイしたことのある方ならばわか
ると思いますが、このゲームはリセット数によってセリフが変わった
りします。なので走るときは必ずデータリセットした上で行いま
しょう（1敗）因みにその関係でOPは飛ばせません。諸行無常也。
飛ばせないOPなんて見飽きてる！ そんな皆様のために。こ
の間に説明でもしましうかね。

用意した動画はないのか、ですって？ ハハ。そんなもの、ウチに
はないよ……。

ゴホン。それではこのゲームの独自性を説明しましょう。この
ゲーム、実は結構作り込まれていてですね。私たちプレイヤーの指示
を画面の先にいる操作キャラクターは神託（ハンドアウト）という形で受け取りま
す。開発陣はコブスレ好きなんですかね。

そしてそれぞれに内蔵されたAIがその神託（ハンドアウト）の内容を吟味して動
く、というものになります。そしてこの内蔵AIが名前をもとにした
行動をするんですよ。そんなにも作り込んで、誇らしくならないん
ですか？

と、そんなことは置いておいて。試走で使っていたホモくんは、そ
の……男キャラクターがいないとやる気を出さない子だったので、扱
いが少し難しかったです。名前をV i c t i m にしたのはそんな意
味もあります。

……OPまだ終わらないんですか？ そうですか。

えーと。それでは今更ながらにご注意を。私は今回がRTAを投
稿することも初めての事ですので、文章が汚い、画面が見辛いなどの
ことがあると思います。

なので、先んじて皆様には言っておきます。見づらいつか言うなら

見ないでブラウザバックしてください。(この先を)見ていいのは(私の痴態を) 見ることができる覚悟があるやつだけだ!

とと、名言を改悪してる内にちようどいい感じにOPも終わりましたね。それでは改めて向かって逝きます!

ここで隣に寝転がっているのはソロプレイ時の操作キャラクターである八人目くんちゃんです。この子の場合死んでもコンティニューを選ばされるので自殺チャートでは使えません。だから、『二人の地下世界』で走る必要が、あつたんですね。(いつもの構文)

八人目くんちゃん站了起来とこで操作可能になります。すぐに起き上がってそれとなく八人目くんちゃんを誘導しながら先へ進みましょう。

少し歩いたところで内開きで開け放たれた扉があります。覗いてみればそこには一筋の光とちよつとの緑地に咲く金色の花が風に揺られています。

はい。みんな大好きなクソ花ことFlowey君です。八人目くんちゃんです。P√に行けば意見が百八十度変わる人が出てきます。なんででしょうね(すつとぼけ)

そんなFlowey君の飛ばしてくる”仲良しカプセル”ですが、ちゃんと二人にそれぞれ撃つてくれます。当然、避けずに一番早く当たることのできる左上で待機させます。

当たりましたね。瀕死になるので今度は左下に移動しましょう。……しかし、少ししか動かしていませんがVictim氏はだいぶ素直に動いてくれますね。ホモくんはここですらちよつと渋っていた気がしていたのですが……。

これはVictimって名前が大分当たりなのでは？

つと。そんなこと言っている間にみんなのマツマが炎を飛ばしてFlowey君を吹き飛ばしてくれました。

最初プレイしていた時は植物に炎で燃えそうって思っていました。枯れていない限り中に水を含んでいるので意外とすぐには燃えないらしいです。詳しくは知らん。

リアル友人が自慢げに話してきたのを思い出ただけです。深

い意味はありません。彼は不快でしたが。？ツクテーン／

私の激うまギャグが炸裂したところでマツマについていく二人を背景に今回はここまで。

次回はみんな知ってるこのRTA唯一のパズル要素です。「なんで？」とお思いの方に説明するとそもそもチャートそのものが短いんですよね。まあそれが自殺チャートの良さなんですけど。

短いチャートで済むせいで走者が多くて世界最速ワールドレコードの称号は他と比べた場合、割とコロコロ更新されています。はえくすつごい。

そんなRTA事情は置いておいて、それでは次回をお楽しみに！

RTA―2 パズルの道からマツマの説得まで

Victim氏以外死ななくていい優しいRPGのRTA、はーじまーるよー。

というわけでパート2ですネ。

テキストスキップしてるので軽く説明しますが、マツマ曰く地下世界ではパズルを解く必要があるようです。頭鍛えられそう。

そして画面ではパズルの道が始まりましたね。この道は正直ルートを間違えないようにしておけばいいです。が、しかし自分だけで進むと八人目くんちゃんが引っ掛かり、タイムロスになることがあります(5敗)

なので神託ハンドアウトを与えて八人目くんちゃんと手を繋がせて、さつさと進んでしましましょう。

とはいえ最初はさつさと壁のボタンを調べておしまいです。ここでのタイム短縮法ですが、先のボタンには八人目くんちゃんを向かわせておいてVictim氏は手前のボタンを調べさせましょう。イベントは両方のスイッチを押すことが条件なので、ちよつと早くなります。

更に分担作業にすることで少し好感度を稼げます。好感度が高いと多少不審な行動をしても見逃してくれます。だからこの先もタイム短縮になり得たり、タイムが変わらなかつたりするところではダウンロード好感度を上げていきます。

チャートは短いので活躍する場面は少ないですが、それでもRTAをする以上、まるで未来を知っているような行動はせざるを得ませんからね。必須ではないですが稼いでおくと精神的に楽になると思います。他の走者はあんまり稼いでないイメージがありますが、なぜなのでしょうね。

スイッチを押したら次はマネキンとの戦闘です。ここはマツマの言うとおりにこうAこうCどうして終わりです。それ以外だとちよつと会話が長くなるのでテキストスキップ分だけロス…だったと思います(うる覚え)

そしてまたついていくのですが、ここのもので一度エンカウントが入ります。ここはすぐに逃げましょう。逃げないとマツマが睨みをきかせにくるのでロスです。

なので八人目くんちゃんの手を取らせてマツマのいる方へ逃げます。次は針の道ですが、正直やることはありません。イベントだからね、しようがないね。ここ二人モードだとマツマ、八人目くんちゃん、操作キャラの順でトラクエ歩きになります。

次にしばらくの間歩くのですが、普通に八人目くんちゃんと軽くお喋りして好感度を稼ぎながら進みます。

マツマからあなた達を試していたと言われて、待っているように指示されますが普通に待っただけロスなので進みます。八人目くんちゃんは少し止めようとしてきますが、『二人で進んで褒めてもらおう』と言うとすぐについてきてくれます。チョロイ。

この先はランダムエンカウントですが、普通にすべて無視して逃げます。Victim氏の死に所はもうすでに決まっているので、それ以外で死ぬことは許されません（タイム的な意味で）

次に岩を動かすのですが、八人目くんちゃんと協力すると好感度が少し上がります。タイムに影響はありません。

エンカウントしたら即逃げして、次の落とし穴地帯は心眼を持って走り抜けます。ちゃんと八人目くんちゃんの手を握るように指示しましょう（2敗）

次は三つある岩の内一番下の岩を動かします。この岩は話してきますが普通にテキストスキップするので何言ってるのかわからないですね。

右側から引つ張ると岩の移動に合わせて一緒に押してくれます。

そして針のところまで行くと岩さんはなぜか動いて針を出すという意地悪してくるのですが、その場で睨みをきかせると一瞬待つてから動いてくれます。

普通にまた動いてもらうよりも速いのでこっちの方を採用してます。時々動いてくれない場合があるのは何でしょうか…。まあ動いてくれなかつたらリセするだけなんですけど。

次にセーブポイントがありますが、実はVictim氏はケツイの光を見ることができません。

というのもあれはあくまでセーブ、ロードを行える八人目くんちゃんにとつてのセーブポイントなんですよ。なのでVictim氏には見えないんですよ。

まあ八人目くんちゃんが勝手にセーブしてくれるのでほぼほぼオートセーブ機能です。そして八人目くんちゃんがAIの場合はマップを移動すると八人目くんちゃんはパズル要素に引っかかっている限り隣に出現するので自分でセーブするより速いです。

だいぶ遠くにいるときでもマップ移動すると隣にいます。オマエも近道使えたんかワレエ…。

そんな裏技は置いておいて。次は内気な幽霊のNapstablookくんと戦闘です。全力で励ましましょう。

攻撃は全部避けさせます。実はこの時、八人目くんちゃんのソウルはAIによる自動操作なのですが、この瞬間だけコントローラーを接続することで二画面同時操作も可能です。まあ接続時間分だけロスになるのでやらないんですけどね。

というわけでガンガン励まして、戦闘終了です。ちなみにこの遺跡の中にはおもちゃのナイフがあつたりしますが、普通に無視しましょう。開放√が狙いなら装備更新は必要ないって、それ一番言われてるから。

というわけで落とし穴の間ですが、Victim氏は上側の真ん中、八人目くんちゃんは…下側一番左に行きましたね。これはVictim氏の一個手前でない限りタイムにロスははないです。

下側左だとりボンがあるのでむしろ八人目くんちゃんの防御力が上がって少し心が楽になります。あとリボンを結んであげることです。少しロスしますが、好感度が上がります。当然結ばせます。

次に色スイッチですが、正解のスイッチの場所を覚えておけば…：やっぱりすぐに動きますね。ホモくんだと”この先にはイイ男が待っているぞ”とことあるごとに教えないと動いてくれなかったのですが…。

エンカウントしたら逃げます。逃げて逃げて逃げ続けます。八人目くんちゃんの手を取って逃げることで少し好感度を稼げます。一緒に行動したら倍の好感度を稼げます。

タイムの為には愛を捨てねばならぬのだ……。

はい。これにて遺跡のパズルは終了です。

そしてマツマが迎えに来ようとしているところにはったりと出くわします。誇らしげな表情をしていると何も言わずに少し褒めて貰ってからシナリオが進みます。

ここもセーブポイントがありますがやっぱり見えないので八人目くんちゃんに任せます。

マツマが新しいお家に招いてくれましたね。まあ何もせずに出ていくんですけど。

仮眠もとらずにマツマに直談判しに行きます。八人目くんちゃんは仮眠をとることが多いですが、ある程度好感度を稼いでいると一緒に来てくれます。

この時に仮眠するとバタースコッチシナモンパイという最強の回復アイテムをゲットできます。本チャートでは要らないので取りません。

そうしたらカタツムリトークを無視してテキストを飛ばしつつ、選択肢の3つ目で右を選びます(13敗)

マツマが唐突に移動し始めるので追いかけます。この時も八人目くんちゃんの手を握っておかせましょう。八人目くんちゃんがいなかったら全力ダッシュです。

どうやらマツマは八人目くんちゃんとVictim氏の身を案じているようですが、Victim氏には大事な使命がありますからね。全力で追いかけます。

外に続く扉を破壊するとか言っただけ脅迫してきますが、そんなことはさせない!

というわけで次回がこのRTA最大の難所です。具体的にはマツマの行動的な意味で。

それでは次回、『Victim、死す!』デュエルスタンバイ!

RTA―3 運ゲーすぎる戦闘から退場まで

クツソ運ゲーな戦闘に身を任せるしかないRTA、はーじまーるよー。

というわけでパート3となりました。今回はマツマとの完全運ゲーな戦闘です。

早速戦闘場面からですが、全力で見逃しましょう。それ以外のコマンドはそのままロスになります。

そしてこちらの行動が終わるとマツマの攻撃が来ますが、これはおてて攻撃が来ることを祈りましょう。

そのおてて攻撃ではワザと被弾することで普通よりも早くターンを終わらせることができます。そしてニンゲンの内どちらかのHPが低くなるとその後は一切攻撃を当ててこなくなります。

今回は……おてて攻撃じゃないやん！ ま、まあランダム行動だから……（震え声）

………うーん。しかしこんなの見せててもしょうがない気がするんですよねえ……。

というわけで『自殺チャート』についての解説でもしましょうか。この『自殺チャート』ですが、前日も言った通り走者がとても多いです。

だつてチャートとして書かれていることなんて

1. ルート構築を完璧にする。
2. エンカウントをした場合最短フレイムで逃げる。
3. マツマとの戦闘を高速で終わらせる。
4. ズニキと出会ったらソウルを王様に届けるようお願いしつつ死ぬ。

このたったの4ステップです。簡単でしょう？

ちなみに自殺禁止の場合ではその後のスシネキに頃される必要があります。スシネキはロイヤルガードなので、死んだ人間のソウルを直で王様に渡してくれるんですよね。

ただ、ズニキはみんな大好きな近道Shortcutを使えるのでその分速いで

す。

え？ 死んだら終わりじゃないのか、だって？

残念ながら死んだ場合は自分のソウルを持っていてる相手にだけ見える亡霊みたいな感じで行動することになるんですよ。

なので死んだ上で最速で届けてくれるズニキルートが大人気なんですよ。

このルートの敗因として結構多いのは、ズニキの前でリセットなどのことについてほめかしたりするとソウルを砕かれる点です。

その時は普通にゲームオーバーなのでリセットです。神託ハンドアウトについて語っても場合によっては砕かれます（n敗）

ズニキ説得が一番楽なのは”神託ハンドアウトがそう言った”なんですけど、それでも乱数次第で砕かれちゃうんですよ。

リセット続きで嫌になって弟クンを頃したりしててくらしいし心当たりがないんですけど、それもセーブデータごとのリセットで消えているはずなんですよねえ…。

ちなみにRTA抜きの、通常プレイもとっても面白いですよ。

エンディングの数だつて多いですからね。とっても素晴らしいことですよ。

ん、戦闘はもうちよつと続きそう…。

あつそうだ（唐突）

ちなみにこのゲーム、八人目くんちゃんにセーブアンドロード権があるんですけど。八人目くんちゃんがその先のセーブポイントまでの区間で死んだかどうかを判定されて、ロードしたと判断された場合に一瞬セーブポイントで描画が揺れたりします。

本当に細かいところまで作られてるよなあ…。ちなみに今回は一度もロードされていません。今回の八人目くんちゃんは優秀みみたいですね。

というかそんなところまで作り込んでるなんてホント開発陣は変態さんですよ。嫌いじゃないです。

と、そんなことを言っている内に戦闘が終わりましたね。

マツマからの抱擁を受けてからいざ鎌倉！

えー、今回…遺跡の外に出ることができたんですけどもー。参加者は…（隣にいる八人目くんちゃんを除き）誰一人、いませんでした。というわけで遺跡とスノーフル間の道です。出てきた扉のすぐ奥にある茂みには監視カメラがありますが、無視します。タイムロスなもの、しようがないね。

無言で歩かせても何のうま味もないので八人目くんちゃんと会話でもしてもらいましょう。好感度が上がれば何か変化があるかもしれませんしね。

目の前に見えてきた枝を通り過ぎて少しすると、大きな音を立てて枝が折れます。

あらやだ怖いわー。……あれ？ これは少し速度が上がりましたね。クオレハ…：試走時点では見つけていなかった隠し要素じやな？ やった！ タイムが少し縮まるぞ！

と、橋の前まで着いたところでズニキの登場です。やったぜ。

※私は SE を 追加 していません。

はい。随分と汚い音声を鳴らすブーブークッションを仕掛けられました。今日も私は元気です。

そしてすぐに隠れるように言われます。このタイミングで死ぬと実はロスになるのでここはおとなしく隠れましょう（24敗）…：最初の内はわからなかったんや。あとホモくんが勝手に行動した。

テキストスキップをしている間にリアルスターな弟クンが去っていききました。そして少し会話をするので、今回は…：そうですね。

”これで、みんなを助けてあげて”

そんなセリフを吐いてもらいましょう。そして唐突に自分の舌を噛み千切ります。

八人目くんちゃんとズニキにS A N チェックが入りますが、致し方ない犠牲、俗に言うコラテラルダメージです。

というわけで少し V i c t i m 氏と八人目くんちゃんの会話が入って微ロスしましたが、テキストスキップ余裕でした。

ガツチャ！ これにて本 R T A 終了ですね。タイムは…：ファツ

!?

な、なんで八人目くんちゃんがVictim氏のソウルを持って逃げているんですか!? ちょちょちょよ、ズニキ追いかけてくださいよ! というか八人目くんちゃん、離せ! 離さんかあ!

ダメですね、離してくれません……。これは相当ケツイをキめてますよ…。

つまりアレじゃな?

再 走 案 件

はあくつつかえ。マジか八人目くんちゃん。そんなことしてくれたんかわれえ…。

……:はい。当然ですが後付け音声なのでこの程度のこととは知っていました。けれど正直ですね。これは投稿しなければならぬ! と心から感じたので現在こうして投稿しているんですよ。

具体的には、他のRTA走者への戒めとして。

えー、今回こうなった原因ですが、多分好感度です。あと名前も少し。

他の走者が好感度を一切稼がずに走っていたので、逆に好感度を稼いでやろうと思っていたんですが、多分その好感度を稼ぎすぎたせいでこうなってしまったんだと思います。

おまけにVictimって名前のせいで同情を煽ったんじゃないですかね。

というわけで、この先は私はもう所々で離せと言うくらいしかできませんでした。

この時点でロスですが、私はもうリセットしたくないので最後まで見守りましたとも。まあ、録画したままふて寝しただけなんですけどね。

それで一応録画ファイル確認して、面倒だからこのまま動画にしよう、というわけです。

みんなが走るときは、好感度を稼ぎすぎないようにしようね!

ちなみにこの先ですが、八人目くんちゃんがP√を走るだけなので全力ツトします。

R T A (タイトル詐欺) ……。ハハツ、ワロス。

ちなみに八人目くんちゃんがP√完走まででタイムは3時間以上かかっています。こんなんじやWRなんて取れないよお！

現行の最速の人と比べたら倍くらいあるわけですよ。

あーもう。マヂムリ…。リス化しよ。ドングリオイシイ。

再走は、きつとしません。心が折れる音がしました。それでは皆様、ご視聴ありがとうございます。

ところで私が走ったんだから、さあ？ (同調圧力先輩)

Neutral 穴に落ちてから Monster
rに助けられるまで

《Victim》

いつからか、それもわからなくらい昔から私はカミサマの声が聞こえていた。

別に誰に言うでもなく過ごしてきたけれど、どうやら私は地下世界の Monster 達に捧げるイケニエ……らしい。

カミサマも同じことを言っていたから、そのことに間違いはないと思う。けれど、カミサマが言うには時期が違う、らしい。

だからイケニエである私はカミサマに従うことにした。村のみんながカミサマに祈ってたのは知ってる。だからカミサマに従う方がいいって思ったから。

そうして、カミサマに従って動いて、カミサマの言う通りのところに開いていた穴から落ちた。

少しの間気絶していたけれど、目を覚ましていると私のほかにもう一人、ニンゲンがいた。カミサマが言うにはそういうものらしい。

カミサマに口答えなんのできる立場にもいないので何かを言うつもりはない。

カミサマにしたがって、隣で起き上がってきた子供を誘導する。とは言っても、先に行ってみようとしか言えないのだけれど。

「……わかった。行こう」

そう言ってくれたから、多分よかったんだと思う。そして先に進むのだから、歩いていく。少ししたところで扉のようなものがあった。その先を見てみれば少し緑の土地があつて、さらにそこで金色の花が生えている。

「やあ！ ボクは Flowey。お花の Flowey さ！ 君たちは見たところ……」

カミサマが聞く必要はないというから、聞かなかつたことにする。

別に聞く必要もないのだろう。だってカミサマが言うんだから。

そうして向けられた”仲良しカプセル”というらしいものに当たりに行く。そんな私の様子を見てFlowyは一瞬驚いたようだったけれど、関係ない。

弾に当たるとその弾は破裂して、随分と血が流れて行ってしまった。そんなことを他人事のように見ている私がいる。

イケニエは死ぬのが仕事らしい。だから別に死ぬことに抵抗はない。その割にカミサマはまだ先があるような話し方をしている。何があるのだろうか？ けれどカミサマは未来を知っているようだし、だったら従う方がいいのだろう。

そんなことを考えていたら奥から慌てた様子で駆けつけてきたらしいMonsterがFlowyを追い払ってしまった。

どうやら、私の死ぬところはここではないらしい。

じゃあ、一体どこなんだろう。私は一体どこで死ぬのだろう。考えたところで答えは出ない。

いつだって私はカミサマに従っていればいい。

だって、それがイケニエに与えられた役割らしいから。

ところで、時々話に出てくる”ホモ”って一体誰なのだろう。”シソウ”などと言っているし、やっぱりカミサマのいう事を私は十全に理解することはできないらしい。

カミサマの指示は具体的だから、迷うことはないけれどもしかしたらカミサマは私に合わせてわかりやすい言葉で言ってくれているかもしれない。

だとしたら、カミサマの手を煩わせていることがとても悲しい。けれど。そんなことを思ったところで私に学がないことに変わりはない。

イケニエには、知識がいらないってみんな言っていたから、勉強はさせてもらえなかった。

そのせいでカミサマの言葉を理解できないのなら、私はイケニエ失格かもしれない。



《八人目くんちゃん》

その日、ボクは地下に落ちた。

その先で見たのはボクを受け止めてくれた金色の花のクッションと、妙に落ち着いた様子の子供だった。……子供とは言っても、ボクと同じくらいの歳だと思うけれど。

「この先に行ってみよう」

変に抑揚のない声でそう言われて、一瞬だけと体が硬直してしまった。見たところ身に着けている物はあまり上等とは言えない。

ボクの着ている服も汚れてしまっているが、目の前の子の着ているそれはボクのよりもボロボロだ。けれどそんなことを言う暇もなく返事を求められていることはわかった。

どこか上の空な様子の子は、ボクをジッと見つめている。

「わかった。行こう」

結局のところ、口にできたのはそれだけだ。

少し先に行くと、そこには扉があった。扉の先を一緒になって覗いてみると金色の花が咲いている。風に揺られているように見えるが、ボクのいる場所に風はない。

風があるのなら外に続いているのかもしれないと思ってその花の目の前まで行ってみる。けれどまだ風は感じられない。

「やあー」

突然そんな声が聞こえてきて。隣にいた子を見てみるが、その子はボクの方も見ずに下の方を向いている。その視線を追ってみればその先には顔の金色の花があった。

そんなものがあるとは知らずに驚いて思考が鈍くなっている内に話が進んでいく。

ここは地下で、LOVEって言うものがあることは聞き取れたけれど、何か白い球が飛んできていた。

顔のあるお花：Flowerが言うにはこれがLOVEを分ける

ときに使われるもの：らしい。

隣を見てみると真っ先に取りに行っている様子が見えた。ボクは少し怖くなって警戒していたけれど、それも必要なかったのかもしれないと思っ手て手を伸ばす。

そして、隣から破裂音がするのを聞いた次の瞬間に、ボクの手の中で白い球が破裂した。

大量の血が流れて行っていると思うが、そんなことを確認する余裕がないほどの痛みへのうち回る。

Floweyが何か言っているが、正常に判断ができない。頭の中全てが痛いつて単語で埋め尽くされる。けれどどうにか目を開いて。見えてきたのは大量の白い弾で……それがゆっくりと近づいてくる。その弾が怖くて目を固く瞑るが、痛みは一向にやってこない。それどころかさつきまであんなに感じていた痛みが引いてしまった。

目を開いて前を見てみると、Torielと言うらしい女性のMosterがFloweyを追い払って自己紹介をしてくれるところだった。

けれど、さつきのFloweyを見た後だともこの優しさに疑いを持つてしまう。……隣にいた子はひよいひよいついて行っているが、ボクはまだ警戒せずにはいられなかった。

Neutral—2 分かりやすいパズルから二人つきりが始まるまで

《Victim》

——手をつないで進んで。

カミサマからの指示が来た。その指示にしたがって隣にいる子供の手を握る。なんでかさつきしたはずのケガはすっかり消えていた。けれど、いつだつて私のすることに変わりはない。よく見てみると子供は少し遅れている。もしかしたら、カミサマは子供が遅れることを危惧しているのかもしれない。

だから私は少しだけ進む足を緩めて、子供の手を握る。握った瞬間は驚いたみたいだつたけれど、すぐに握り返してくれた。

そのまま握った手を引いて歩く。前にいるMonsterはそんな私たちを見てどこか嬉しそうな様子だ。

目の前でMonsterが立ち止まって何か話すが、カミサマの言う通りに聞き流す。必要なことはカミサマが教えてくれるから、それでもいいだろう。

——矢印の書かれたスイッチを押して。その子は奥に行かせて。カミサマの指示だ。言うとおりにしよう。一度手を放してから矢印のあるスイッチを押そうと提案する。

少し消極的な様子だが、奥の方をお願いしてすぐに手前のスイッチに歩き出したら何を言っても無駄だとわかったのか、おとなしく奥のスイッチに向かってくれた。

スイッチを押して、その間にMonsterの前まで歩く。

私がMonsterの目の前に着いたところであの子供もスイッチを押したようで、Monsterの奥にあった針の生えた床から針が引っ込んでいった。

どうやらそのためのスイッチ……パズルだったようだ。この後に出てくるものも同じようなものだろう。だったら、さほど複雑な

指示もこなさそうだ。

次の部屋に行ってみればそこにはマネキンが立っていた。どうやらこのマネキンと話をしなければならぬようだ。

……ここはいいね。とつても過ごしやすいよ。

何となく思ったことを行ってみるが、当然返事は返ってこない。なんともチグハグな会話だ。

子供も同じように一方的な話を終えて、Monsterが少し喋る。当然聞き流して、先に進む。

すると針が敷き詰められた道が見えたところでMonsterが現れた。

——その子供と逃げて。今すぐに。

カミサマがそういうから、危険なモノかもしれない。

何か行動をしようとしていた子供の手を取って案内してくれていたMonsterの方まで走って逃げる。子供は少し不満げだが、これでいいのだろう。

次に挑むのは目の前のとげの道のような道だった。ヒントと思わしき物も見えないことまで相まって、少し狼狽えてしまう。

カミサマも何も言ってくれないことに焦っていたら、今度は子供の方が手を伸ばしてきた。どうやらMonsterと手をつないで歩いて行くようだ。……確かに、これなら指示は必要ない。

やっぱりカミサマは未来を知っているらしい。それはつまり、本当の意味で何も考える必要がないという事だ。だって、カミサマは未来を知っていて、そこに私を導いてくれるのだから。

次では手を離されてすぐにMonsterが走り去ってしまった。

——お話でもしながら進んで。

そう言われたから話を始める。けれど地上で友達のいなかった私には何を話すべきなのかわからない。

どうしたものかと口をモゴモゴさせていたら子供の方から話を振ってくれた。

「えっと、キミは名前……なんて言うの？」

「……Victim。私は、イケニエだから」

「イ、イケニエ……。あ、ち、地上では何してた……。の？」

「……何も。イケニエには何もいらぬから」

「え、ええつと……」

何か、さっきのマネキンと同じような会話になってしまっている。これはあまりよろしくないことだと思いが、今更どうしようもできなかった。



《八人目くんちゃん》

隣にいる子は、時々どこかわからないところを見ている。

今だって、どこかわからないところを見ていて一瞬Torielさんについていく速度が遅れていた。

後ろにいるからそういうことがよくわかる。何を考えていたのかはわからないが、今の状況では先に進む以外の道がないことに変わりはない。

「……………」

「……………えつ？」

何も言われぬままにこつちに来た子はボクの手を握った。

そうされてから、もしかしたらこの子も不安なのかもしれないと行き当たって、ボクがこの手を握り返すことで不安が張れるのならと、握り返した。

握った手を引かれるままに進んでいると、これ見よがしに書かれた矢印に囲まれたスイッチがある道についた。

あからさますぎるそれは、きつとこの道にある仕掛けを解くための答えなのだろう。

「…奥、お願い」

「えつ、ちよ、ちよつと」

お願いされてからすぐに手を離されて、その子は先に手前のスイッチへ歩いて行ってしまった。何かを言う時間すら与えられなかった

こともあつて渋谷奥にあるスイッチへ向かう。

矢印と一緒にこのスイッチが正解だという文章が書かれている。

その文に従つてスイッチを押す。少し引つ張るだけで作動したそれは、道の先で何かが起きたようだった。

振り返つて見てみれば道の先に何か小さな穴が開いている。どうやらあそこに壁のようなものがあつたらしい。

……こう言つては悪いが、子供騙しのような謎ばかりだ。この先もそんなのだろうか。

そんな言いようのない考えを持ちながらも先へ進む。

道の先で待ち構えていたのは物を言わないマネキンだった。

Monsterに出会ったら話をしろ、という事でその練習らしい。……どうやら、本当にこのTorielさんは心優しいようだ。

疑つてかかったことを謝つたほうがいいかもしれない。間違えたらごめんなさいはするべきことだから。

「ここはいいね。とつても過ごしやすいよ」

隣に立った子がそんなことを言うのを横目に見ながら何か話す話題を探す。

どうにか出てきたのは結局隣の子と変わり映えない内容だった。

しかし話しかけたところでマネキンである以上、返事はない。一方的な、滑稽な会話だ。

けれどTorielさんは満足げに頷いている。

警戒していた自分がバカに思えてくる。だから警戒も解いていたところだった。

そこに何とMonsterが現れたんだ。

さつき言われたことを早速試そうと話す内容を考えていると、手首を掴まれ、そのまま引つ張られる。

どうやらもう一人の子に引つ張られて、逃げることになってしまったようだ。

もしかしたらまだ他のMonsterが怖いのかもしれないし、強くは言えない。

だから何も言わずにいたが、どうやら次は針でびつしりと埋められ

た道だった。

さすがにこれはないだろうと足をすくませていたら、その様子を見ていたTorieeさんにまだ早いと言われ、手を引かれながら進むことになった。

初めて触るその手はモフモフとした毛におおわれていて、とても暖かかった。

もう一つの手をすぐ後ろにいた子の手とつなぐ。

そして針の道を通り終えたところだった。急に手を離されて、Torieeさんは走り去ってしまったのだ。

けれどそのまま進んでいる間に、隣で歩いている子が口をモゴモゴとさせている。

何か言いたいのかもしれないと思って少し待っていたが、その口からは何も出てこない。だからボクから話しかけることにした。

まずは無難に名前を聞いてみると、どうやらVictimというらしい。それも、イケニエだからという理由で。

思わず何も言えなくなつて、地上での思い出を聞いてみるが、話はまだ弾まない。

結局、ボクが当たり障りのないことを話しながら進むことになってしまった。

《Victim》

ほぼ一方的な会話ながらに廊下を進み終えたところで、Monsterが何かを話していた。

カミサマの言うとおりにしていただけなのだけれど、隣にいる子供がなんなのか、よくわからない。

ほら、またカミサマからの指示が来た。今度は先に進むらしい。

——先に進もう。

そう提案をしてみるが、子供はあまり首を縦には振ってくれない。どうしたものかと思っていると、また指示が来た。

——二人だけで先に進めれば褒めてもらえるかもしれない。

そういえと言われたから、言う。たったそれだけの事だったのに子供は少し悩んでから進むことに決めたらしい。

カミサマの言う通りに進んでいる間に何度かMonsterが出てきたが、全部無視して逃げる。

子供が何か言おうとしているけれど、関係ない。ただカミサマの言うとおりに進んでいけばいい。それだけの事なんだから。

「ねえ、お話ししないの?」

そんな提案は知らない。カミサマがしないとさえ言えないのだ。

だってそれがVictimの仕事なんだから。カミサマは何でも知ってるから、イケニエである私は何も知らなくていい。

ほら、カンタンだ。だってそうしているだけで全部が終わるんだから。

ここにあるパズルだって、なんでもカミサマが教えてくれる。

だってカミサマなんだから、わからないはずがないんだ。岩を押したり、ヒビ割れた床を通ろうとしたり。全部、カミサマの言うとおりに動いていれればすぐに終わった。

やっぱりカミサマはすごい。未来が見えていて、私なんかには教えてくれないような優しさがある。カミサマが言うにはそのままの未来で

はただ死ぬことになっていたらしい私を、こうして導いてくれるんだ。

「グーグー」

「えっと……う？」

口でグーグーと言っているお化けがいた……？

——励ましてあげて。

……カミサマがそう言ったんだから、そうすればいいんだろう。

起こして、褒めて、褒める。褒めるのに必要な言葉はカミサマが教えてくれる。

少ししたらどこかに行ったお化けを見送って、また歩き出す。Monsterが出てきたら子供の手を取って逃げる。そうして大半の時間を走りながら遺跡のパズルを抜け出した。

——誇らしげにしましょうね。

そう言われて、誇らしげと取れるらしい表情を形作る。Monsterは少し困ったような表情をしたが、それもすぐに消えた。

案内された部屋の中には入らずに、カミサマの言うとおりに私は動く。

——外に出してもらおう。

そう言われたから、外に出してほしいとお願いをする。

なぜか子供もついてきて、一緒に説得をしたら”少し早くなった”と言っていた。なにが早くなったのだろう？

早くなったことが嬉しいのなら、もっと早くしないといけない。私はカミサマの言うとおりにしないとイケないけれど、できれば喜んで欲しいから。

——最初で最後の戦闘だよ。

ああ、どうやら私たちは戦うらしい。

けれど、別に関係はない。私はただ、カミサマのやりたいことを代行するだけのイケニエなんだから。



《八人目くんちゃん》

隣にいた子……Victimはやっぱり、あまり会話をしてくれなかった。何度か話を振っても、すぐに途切れてしまう。

ボクも初めて見るこの地下世界は、どうにも目新しいモノばかりだ。それなのにVictimときたら”まるで見慣れたもの”みたいに一切脇目もふらずに進んでしまう。

ボクとしては、もつと見ていたいのだけれど、そんなことも許されない。……そう思っていたら、目の前にあつた柱の陰からTorie Iさんが出てきた。

どうやら、ボクたちが二人だけでも大丈夫なのかを見ていたようだった。

その試験には合格できたようだ。だから、というわけかはわからないが二人でここにとどまるように言われてしまう。

勿論待っていると頷いたらTorie Iさんは安心した様子で去っていった。ボクに携帯を渡して。

それで何ができるのかを考えていたら、一緒に待とうとしていたはずのVictimが立ち上がって先に進もうとする。

慌てて止めてみれば、”先に進もう”って言う。

「でも、でもここで待っててって言われたんだよ？ それなのに、先に進むの？」

「進む。……二人で先に進めれば褒めてもらえるかもしれない」

二人で進めれば、褒めてもらえる……？ 確かに、Torie Iさんは来てはいけないうって言っていた。

でも、そんな道を二人で進めていたとしたら……、褒めてくれるのかな。

褒めてもらえるんだとしたら……ボクは、褒めて欲しい。

「……………わかった、行こう」

少し考えてからそう言えば、Victimはすぐにボクの手を握って先へ進もうと歩き出した。

途中で分かれ道があつたり、Monsterが出てきてもVictim

imは構わず先へ進んでいく。何かに突き動かされるように、ずっと前だけを見て。

「ねえ、お話ししないの?」

Torieさんは、Monsterと出会ったらお話しをしようと
言っていた。

それなのにVictimはなにに追い立てられているように走って逃げ続けている。

ボクの言葉に対しても、次に出てきたMonsterを逃げることで答えられてしまう。どうやら本当にVictimは逃げ続けるつもりらしい。

でも、そんなことじゃいつまでたっても彼らはボクたちのことをわかってくれない。それなのにどうして逃げ続けるのだろう。

パズルの事になると一緒に動かそうと提案してくれるけれど、Victimは他の事では声をかけてくることがない。

ボクの手を取って、ずっとせかさされているように歩き続けている。どうにか一緒にお話をしたいって、そう思っていた時だった。

「グーグー」

えっと……多分、口でそう言っているユウレイが落ち葉の上で寝転がっていた。

ボクが起こしてみたら、なんだかそのままお話の機会が始まってしまった。どういうわけかは知らないが、話をできる、という事に変わりはないらしい。

Victimの方を見てみても、少し考えてからユウレイに励ましを始めたようだ。

「……今日はステキな日だね」

唐突すぎることだったけれど、そうした方がいいのかもしれないから、同じように励ましを選択する。

なんかか励まして、攻撃を避けて……いや、攻撃はそれほどされていないのだけれど。ともかくそれを繰り返すと、NapstablookというらしいユウレイのMonsterは去っていった。

これで先に進めるとわかるとまたVictimはボクの手をとつ

て歩き出す。

少しくらい、変わってもいいと思うのだけど。

『Pr rrrr……』

これまでも何度か鳴っていた携帯がまた鳴り響く。けれど今度はすぐに切れてしまった。

というのも、目の前にTorrielさんが居たんだ。だから電話よりも口でお話する為に電話を切られたんだ。

「……ムフー」

急なことに驚いたけれど、隣でVictimが誇らしげな顔をしていた。

本当に、褒めて欲しいと主張する表情だ。それを見たTorrielさんはそれだけで全てを察したのか、すぐに仕方がないと言いたげに笑ってから案内を再開してくれた。

そうして進んだ先にあるのはHomeというらしいMonster達の家。

そこにある一室に案内された。けれどVictimは部屋の中へ入ることもなくTorrielさんを追いかける。一体何があるのかとついていくと、そこではTorrielさんに外に出たいと説得をしているところだった。

……確かに、この地下世界はステキなところだ。けれど、Victimは……。外に出て、やりたいことがあるのだという。

「私は、外に……行かないと、いけない」

そう言つて、VictimはTorrielさんを見つめる。

うん、ボクも外に出たい。……いや、正確には外に出してあげたい。だから、ボクも説得に参加する。

ボクたち二人に説得されて、Torrielさんはスツと立ち上がると外に向けて歩き出した。

追いかけていると、どうやら外へ続く扉を壊そうとしているらしい。ボクたちの為らしいけれど、ボクは外に出たいんだ。

だから、そんなことはさせない。

ボクたちの前に立ちふさがる Torie さんを説得してみせる。
そんなケツイが、ボクを満たした。

Neutral 4 戦闘開始から声をかけられるまで

《Victim》

……戦いが、始まろうとしている。

目の前にいるMonsterはその手に明らかかなまでの”何か”を漂わせている。

隣にいた子供も、すでに構えを取っている。カミサマからの指示も届く。だから、怖いモノなんてない。

——手を振る攻撃には当たって、後は避けて全力で見逃して。

……これまでの中で、一番曖昧な指示だ。

けれど、関係はない。私がただカミサマの指示に従うだけだということ実に変わりはない。

まずは何もする気はないという事を示すために手を広げて、ハグをするような姿勢を取ってみる。

少しMonsterが止まった気がするが、気のせいのような一瞬だった。

攻撃は手を動かさずに炎を出してくるものだ。だから避ける。

また、見逃す。

手を振る攻撃じゃない。躲す。

見逃す。

手を振ってきた。当たる。すぐにMonsterは攻撃をやめた。

ああ、これが狙いなのだろう。また、見逃す。

何度も何度も見逃して、何度か攻撃に当たって。そうして、ようやくMonsterは諦めたようだった。

すぐに子供の手を取って歩き始める。

外は雪の降っていて、木々の間を切り開かれたような道が続いていた。

隣の子供は寒さに震えていた。私は地上うへにいた時から冬はずっと

そうだったから、今更どうという事はない。

「よ、よくそんなに歩けるね……」

”ボクはこのとおりで寒すぎて……” そう付け加えられる。けれどそんな事はどうだっていい。

ボクを感じられるカミサマが明らかにボクを急がせようとし始めていた。

「とにかく——」

口を開いて、どうにか急がせようとしている時だった。

急に何かが派手に壊れるような音がしたのだ。顔だけを後ろに向けてみればそこでは木の枝がバキバキに折れていた。

何度も踏まなければあはならないはずなだろうことは遠目でもわかる。それなのにその場には何も無い。

それこそ、まるで”折ってから瞬間移動で消えた”みたいな……。

いや、考えても何もわからないんだ。少し急ぐくらいが精々だ。

「急ぐう」

「そ、そうだね……」

子供もこれには素直に賛成してくれて、すぐに足を動かす。

早く、早く。少しでも早くする。そうしたら、カミサマは褒めてくれるはずだから。

そう思っていると、後ろから何かの気配が近づいてきた。きつと、Monsterだろうから逃げられるだけの準備をしておく。

「——よお、ニンゲン」



《八人目くんちゃん》

Torieiさんは、確かにボクたちを止めるつもりでそこに立っていた。

その目は真剣そのものだし、油断なんてどこにもないように見える。

手に漂わせるそれは、きつとほかのMonster達と同じような攻撃が飛んでくるってことだろう。

痛いのも怖いのも、きつと誰もが嫌いだ。なのに隣にいたはずのVictimはいつの間にか前に出て両手を広げていた。

言葉ではなく行動で、Torrieさんの言うMonsterとの対話を実行していた。

”ボクも、争うつもりなんてない!”

そう口にすることはできなかったけれど、同じように握っていた拳をほどく。争うつもりはないと言葉だけではなく、行動で訴えかける。

一瞬、Torrieさんが苦しそうな表情を浮かべた。彼女は優しすぎるほどに心の温かいMonsterだ。きつと本当は、誰かを傷つけるなんてしたくないのかもしれない。

それでもこうして立ちふさがっているのは、本当にボクたちを守るためなのだろう。

———それでも、ボクたちは外地上に出ない帰らないといけないんだ。

ボクの胸の中で改めてケツイがみなぎってくる。

何度もボクらは彼女を許した。けれど、彼女は決して攻撃の手を緩めることはなかった。

彼女の手が振るわれるたびにVictimはその手に向けて歩いていた。その手は攻撃するための魔力チカラに満ちているというのに、自分に傷がつくことさえ厭わずに彼女の手を受け止めていた。

そんなVictimも、絶対に限界はあった。塵も積もれば山となるなんて言うように、攻撃を受けすぎて体はボロボロになっていたのだ。

それでもTorrieさんは決して譲らなかつた。攻撃をしようとして。でも向かってくるVictimを避けるような攻撃しかできなくて……。

ついに、硬い意志を抱いていた彼女が折れた。

そうして扉を開けられると同時にボクの腕を大怪我をしているはずのVictimが力強く掴んで歩き始める。

怪我についてとかいろいろと言いたいことはあったけれど、それよりも体の震えるような寒さの中で普通な顔して歩いているVictimについての声をかけてしまった。

文句のような形になってしまったことを少し心配していると、少し悩んだような素振りの後でVictimが口を開く。

けれど、Victimの言葉は後ろから聞こえてきた派手な音にかき消されてしまった。

振り返って見れば、少し前に通ったはずの丈夫そうだった木の枝がバキバキに折れてしまっている。

それなのに、周りにはなにかがいるような気配はない。まるで、ひとりで木の枝が割れたような雰囲気醸し出している。けれどそれはあり得ない。

だって、あれだけ丈夫そうな枝だったのだから、勝手に折れるなんてまずないはずなんだから。

「急ぐ」

改めてなされた提案になんとか頷いて、歩きから早歩きへとなって速度を上げる。

後ろに何かがある気がするのがとても恐ろしくて、さらに早く動くとしても積もった雪が邪魔をしてそれ以上に早く歩くことができない。

そしてついに、後ろにあつた気配がボクたちに追いついてしまった——
「よお、ニンゲン」

Neutral—5 RTAパートが使えなくなるまで
《Victim視点のみ》

《Victim》

「よお、ニンゲン」

その声は確かに後ろから聞こえてきた。

しかし、私たちの歩いてきた道を通る存在は居なかったはずだ。後ろから追いかけて来たにしても、これはあのMonsterの声じゃない。

「初めて会うのに挨拶もなしか？ こっちを向いて握手しろ」

——その声に従って。

正直、得体のしれない存在に従う気はあまり起きていなかった。これまでのように後ろにいるであろうMonsterから逃げ出すとばかり思っていたから。

けれどカミサマは「つきりと」従え」と私にそう言った。カミサマが言うのだから、きっと後ろにいる存在はMonsterではないのかもしれない。

そう思っただけで振り返って、差し出されていた手と握手をする。

手を握ると、何か空気の入った袋があったようで、それがとても大きな音を鳴らした。

隣にいる子供はとても嫌そうな顔をしている。もしかしたら不快な音だったのかもしれない。

そう思っただけで再び前を見ると、そこには白い、白いなにかがあった。大方シルエツトとしてはニンゲンに似ている、目のある所は白い光があるだけで他はぼんやりと闇が広がっている。

けれど、どうやらそういうMonsterなようだ。Monster相手に逃げなかったのはついさっきの戦いの時くらいだ。

それもこうして道端で遭遇するMonster相手とするのならば初めてだろう。

「あー、どうやらそつちのニンゲンはオイラの退コツな話には聞く耳を持たないみたいだな。スケルトンだけに」

何やらMonsterは僕相手に話しかけているみたいだけれど、カミサマに何も言われないので聞き流す。

その様子に何か変なものを見る目を向けられたが、気にするものじゃない。

ともかく、話を流していると子供に手を取られてランプの後ろに連れていかれる。

私とあの子供にピッタリの大きさのランプがなぜか二つあるおかげで別のMonsterから姿を隠せるそうだ。

軽く触れてみるがしつかりと固定されていて動かさそうにない。……これを持っていけば隠れられるかとも思ったが、現実はそう甘くないようだ。

……いや、そもそもこんな大きなものを持っていたら遅くなってしまっただろうか。ならば持つていく意味はないだろう。

そう思つてランプから手を離れたところで後から現れたMonsterが去つていく。

——さあ、ここです。

唐突に、カミサマがそう言った。

確かにボクはイケニエとして生まれて来たし、生きてきた。だからこそ覚悟はしていたことだ。

けれど、こうして唐突に言われると一瞬躊躇ってしまう。

……いや、躊躇いなんて私には必要ない。だって最初から決まっていただろう。私はイケニエだ。

「——これで、みんなを助けてあげて」

カミサマの言葉をそのまま私が口にする。

軽く息を吸つて、これから死ぬという覚悟を確かに定める。

「なんで、急にそんなことを……」

子供のそんな声が聞こえてきた。けれど、それにはもう答えたはずだ。

私は、Victimだ。だから死ぬ。ただそれだけの事。

「カミサマがそう言ったもの」

最後に一度だけカミサマに逆らってしまった。あの子供にただそれだけを伝えて、決めた覚悟の通りに舌を噛み千切る。

痛みは確かにすごかったが、すぐに私という存在は死んだのだらう。

死んだくせに、私はなぜか思考をしている。どういうことかと思ってもカミサマからの言葉はない。最後に逆らったから見捨てられたのかもしれない。

そう思うとこれからどうすればいいのかまるで分らなくなって、不安で体がガタガタと震える。

「……なんで、オイラに言うんだよ」

そんな声が聞こえてきて、明確に『私』を掴まれる。そして引きずり出されると、明るい光がまず私を拒絶した。

その光から目を逸らして地面を見てみれば、そこには確かに私があった。舌を切った影響なのか、口から赤い液体を溢れさせるニンゲンの遺体。

まず確実に、私だった。

「――Sans、ごめんー」

そこにいた『私を見る』という行為に私が驚いていて、私を引きずり出したMonsterもあまり乗り気ではなかったからだろう。

『私』はそこにいた子供に横から掠め取られて、そのまま子供は走って行ってしまっている。

――な、何が!?

カミサマの焦る声が聞こえる。

まるで、こんなこと知らなかったという声だ。

もしかしたらカミサマは最初から未来なんて見えていなかったのかもかもしれない。そう思うが、けれどももう遅い。私は死んでしまったし、こうしてカミサマの想定外は起きてしまった。

――とりあえず、離してもらいなさい!

カミサマが初めて使う”命令”の口調。

けれど声すら届かないだろうと思いなながらも”離して”と声に上

げようとしてみる。

そうすると子供は足を止めて、周りを見回し始める。もしかしたら声が聞こえたのかもしれないと思ってもう一度同じように『私』を離すように要求する。

今度のはつきりと『私』の視点である方を見て少し驚いたような顔をしながらも、首を横へ振られてしまう。

「ボクは、キミを外に出してあげるって決めたんだ。だから絶対に……キミには、外の美しい世界を知って欲しい」

”Victim”なんて悲しいじゃないかと付け加えられる。けれど、そんなことは知らない。

私はカミサマの指示に従うためだけに産まれて、生きてきたんだ。それなのに急に君みたいなやつに横からかつさらわれて”自由に生きろ”なんて無茶だ。

私はカミサマに従う以外の”生き方”を知らないんだから。

「だから、離してよ!!」

そうはつきりと声に上げる。

けれど今度は明確に、より早く子供は拒絶を示して歩き始めてしまった。

カミサマも、諦めたようなため息を零している。これは、本当に見捨てられたのだろう。

私は今、生きる指標であるカミサマも失った。代わりに得られたのは先の見えない真つ暗なジユウという訳の分からないモノだ。

そんなものはいらない! 私はVictimなんだから、イケニエらしく死んで……そして、代わりに誰かを幸せにできるだけでよかったんだ。

ただ産まれて死ぬだけだった私に、カミサマが意味を与えてくれたんだ。それなのに、それを失って得るようなジユウなんて、私はいない。

私はただ……カミサマの指示に従っていれば、幸せだったのに。

「違うよ。そんなのは幸せじゃない」

『私』を掴む子供ははつきりと私を否定する。

訳が分からない。じゃあ幸せってのは何なんだ。カミサマから見捨てられて、もう体もない私に……君の言う幸せってやつが掴めるというのか。

八つ当たりのように吐き出した言葉は勢いだけで紡がれて、まるで支離滅裂なものだった。

得られるはずのない幸せを望むなんて……本当に無茶苦茶だ。

そう思っ、答えることもない子供に対してもう一度”離してくれ”と言おうとしたところでようやく子供が口を開いた。

「ボクにとつては、誰かと一緒に居られて……楽しくお話ができれば幸せって感じる」

「そんなのは君の事情だ。私には関係ない」

そうはつきりと突き放したら、子供は少し傷ついたような表情になったけれど、すぐにまたにつこりと笑う。

「そうだね。これはボクのがままだ。だから……ボクが幸せであるためにキミのソウルをSansから奪ったんだ」

”ボクはキミともつと楽しくお話がしたい”って、子供はそう言った。

私は、誰かの幸せの為に死ぬことを強要された。それはあの村でもそうだし、カミサマに言われた時もそうだった。

けれど、目の前の子供はそんなこと一切思ってもいないだろうに”自分の為だ”って言って見せた。

目の前の子供は、自分の為でなく、私の為にと最初は言っていた。それなのに、私の話を聞いたらあつさり”自分の為”に理由を変えた。

——そこまで言われたら、しょうがない。

私が意見を変えるのに必要な時間はそう多くはなかった。

結局、カミサマは私に意味を与えてくれただけで、私自身のことについてはまるで考えていなかった。

けれど、この子供は違う。……理由なんて、それだけで十分だろう。

Neutral 1-6 RTAパートが使えなくなるまで《八人目くんちゃん視点のみ》

《八人目くんちゃん》

「よお、ニンゲン」

静かに、しかし確かにボクたちの耳へ届くその声は低いものだった。

間違つてもTorielさんが追いかけてきたという事はない。絶対に、これまでに会ってきたMonster達とはまるで違う声だ。

「初めて会うのに挨拶もなしか？ こつちを向いて握手しろ」

言葉は命令をするようなものだ。

何も知らない存在相手に、急に握手を強要される。その事実を抑えようのない恐怖がボクを襲う。

けれど、ここで何もしないわけにはいかない。後ろにいるであろうMonsterは少なくとも、ボクたちにあのわざとらしい足音以外何も悟らせないままに近づいてきたんだ。

きつと逃げてもすぐに追いつかれてしまう。それに目の前にある橋はどうやつても二人で渡ることはできそうにない。

そう思つて、何もわからないという恐怖を抱きながらも振り返つて見えた手袋に包まれた手を握る。

するとあたりには何度も形容のしづらい汚らしい音がけたたましく響いた。

……どうやら、ブーブークツションを仕組まれていたらしい。

楽しそうにそう種明かしをされる。……なんだか、恐怖を感じていた自分が馬鹿らしく思えてくる。

「オイラはSans。見ての通りスケルトンさ」

さっきのボクたちの反応がまだ後を引いているのか、クツクツと笑いながら自己紹介をされる。

そのことに腹を立てるわけではないが、何とも言えない気持ちになつているとS a n sは白い光だけの眼をV i c t i mへと向ける。ボクもつられて見てみるとV i c t i mは話も聞かずにボーっとどこかを見ているようだった。

「あー、どうやらそつちのニンゲンはオイラの退コツタイクツな話には聞く耳を持たないみたいだな。スケルトンだけに」

……何と言うか、無理やりと言う他ないギャグだ。

しかし、S a n sはなにかに満足したようで橋の先へ案内してくれる。橋を渡ったところで弟が来るようでランプに隠れるようにと言われたが、

このランプがどういうわけかボクたちにピッタリのサイズの物が置いてあつた。

未だにどこかを見ているような様子のV i c t i mの手を引いてランプの後ろに隠れる。少しすると同じように骨だけのM o n s t e r、スケルトンが奥から歩いてきた。

しかし、弟と言われたが随分と背の高いスケルトンだ。鎧のようなものを着ていたり、S a n sよりもよっぽどしつかりとしていそうな印象を受ける。

少し様子を伺っていると、ヒヤツとした場面もあつたが後から来たスケルトン——P a p y r u sは来た道を戻っていった。

そのことにほっとして、声をかけられてランプから出るとV i c t i mも続いて出てきた。

けれど、その様子がおかしい。

まるで、何かに突き動かされるみたいにボクたちの事を見ているのだ。

その様子に違和感があつて、何があつたのかを聞こうとする。けれど、それよりも早くV i c t i mは口を開いた。

「これで、みんなを助けてあげて」

ただそれだけのことを言つて、意味ありげに口を広げて、舌を突き出してくる。

何をするつもりなのかはすぐにわかつた。だからこそそれを止め

たくて、ボクは気が付けば口を開いていた。

「なんで、急にそんなことを……」

けれど出てきたのは制止の声ではなくて、もっと別の……理由を追求するための物だった。

なぜかわからない、けれどボクの言いたいことではないことに違いはない。

「カミサマがそう言ったもの」

ボクが後悔している間にVictimはそう言って、すぐに舌を噛み千切ってしまった。

今更止めることも、やめて欲しいと説得することも出来なくて何もできなかった自分に対して怒りが沸き上がる。

見ていたはずだ。それなのにボクは何も行動をすることができなかった。きつと、声をかけることなくただ動いていれば間に合ったかもしれないのに、ボクは動けなかった。

「なんで、オイラに言うんだよ」

Sansはそう言って未だに血の出ているVictimに近づく。そして手を胸の中に入れ、引き出した。

その手に握られていたのはこれまでに何度か見たことのあるVictimのソウルだった。

それを見た途端、ボクの頭の中にFloweyのセリフが過る。

『そのハートはねきみのソウルさ。きみという存在そのものと言ってもいい』

……あのSansの持つソウル。それがVictimそのものというのなら、ボクは――

「Sans、ごめん!」

そのことに行き当たった途端にボクは動き出していた。

気が付けばSansの手に持っていたVictimのソウルを奪って、走り出した。

Victimはきつと、本当に”カミサマ”って言う存在の言うとおりに死ぬつもりだったのだろう。

イケニエだからって、そう言って。けれど、ボクはそんなこと許せ

ない。ボクは自分のことをイケニエだっていて、全部諦めていたVictimにこの世界は美しいってことを見せてあげたい。

生きていてもいいんだって、思わせてあげたい。

もう、すでにソウルだけの存在になってしまったし、もしかしたらVictimの意識はここにもないのかもしれない。

それでも、ボクは絶対に離さない。

確かなケツイがボクを満たす。そのケツイは想いを伴って、ボクを突き動かす。

『離しっ！』

——！！

その声は、確かにボクの耳に聞こえてきた。

もしかしたら、そんな一抹の幻想を見てしまっただけでボクはあたりを見回す。けれどどこにもVictimの姿はない。

当たり前のことだし、ついさつき見えていたはずの物をボクが信じていないってことの証明だ。

けれど、確かに聞こえてきたはずだった。

そう思っていると、もう一度聞こえてくる。今度も確実にVictimの声だ。今度こそ見つける為に首を回してみると、ボクの後ろのちよつと上の方……そこにVictimはフワフワと浮いていた。

空中にいる半透明のVictimを見据えてボクはもう一度首を横に振る。

もうキミを離さないって言うケツイはボクの胸にあるんだ。絶対に離さない。

「ボクは、キミを外に出してあげるって決めたんだ。だから絶対に……キミには、外の美しい世界を知ってほしい。……それに、”Victim”なんて悲しいじゃないか」

そう言うと、Victimはもう一度、はつきりとボクを拒絶する。『私はカミサマの指示に従うためだけに生まれて、生きてきたんだ。それなのに急に君みたいになやつに横からかささらわれて”自由に生きる”なんて無茶だ！』

確かに、外ではVictimはずっとそうして生きてきたのかもしれない。

れない。自由なんて微塵も与えられずに、ただ死ぬためだけに生まれて来たって、そう思ってしまったても仕方のないのかもしれない。

けれど”死ぬために生まれてきた”なんてことは絶対にありえない。Victimは生きてよかったはずなんだ。イケニエなんて名前じゃなく、もつと別の名前で……幸せに生きていてよかったはずなんだ。

それなのに、どうしてこうして死ぬことを受け入れてしまうのか。きつと、Victimが”カミサマ”って呼ぶ存在のせいなんだろう。

だとしたらボクはその”カミサマ”を許せない。

だから、離してと声に上げるVictimの言葉を聞かずに、歩き始める。

これはボクの選んだ道だし、ボクの自己満足にすぎないのかもしれない。けれど、ボクはVictimにはせめて美しいものを知って欲しい。

ああ、これは……他の誰でもない、ボクが満足するためだけの行動だ。

ボクがVictimに美しい世界を知って欲しいだけっていう、Victimの意見を無視した想いだ。

間違っても、誰かのためなんてものじゃない。だからこそ、宣言しようじゃないか。

一度、Victimを否定していた口と足を止める。そうして、はつきりともう一度Victimを真正面から見つめる。ボクの真剣さが伝わるように、真っ直ぐ、Victimの眼を見る。

「ボクにとっては、誰かと一緒に居られて……楽しくお話ができれば幸せって感じる」

『そんなのは君の事情だ。私には関係ない』

ああ、確かにそうだ。けれど、はつきりとそう言われるのは少し……覚悟していても辛い。

けれど、ここでへこたれていては何にも始まらないんだ。だからボクは口に出す。

「そうだね。これはボクのがままだ。だから……ボクが幸せであるためにキミのソウルをS a n sから奪ったんだ」

ボクはキミともっと楽しくお話がしたい。もっとキミのことを知りたい。

だからこそ、ボクは絶対に離さない。

そんな、ボクのケツイを言葉に乗せて伝えようとしてみる。

ボクの、どうしようもなく自分勝手な想いで、V i c t i mの意見を変えられるのはわからない。けれど、そうしなければいけないって、ボクが想ったから。

『そこまで言われたら、しようがない』

本当にしようがないって言いたげにV i c t i mはほんの少しだけ、笑ってくれた。

笑って、ボクを許して。そうして、ソウルをボクに預けてくれた。

——ありがとう、V i c t i m。

心の中でしっかりとそう口にして、改めて先を見る。

ああ、きつとボクは諦めたりなんてしないし、迷いもしない。

——だって、一人なんかじゃないんだから。

Neutral—7 最後の戦いが始まる——

ボクは、Monster達みんなと友達になることにした。

Sansと出会ったSnowdinでパズルを仕掛けてきた彼の弟、Papyrus。そのPapyrusの憧れるロイヤルガードの隊長、Undyne。

Hotlandを抜けた先で出会ったAlphysとは、結局Mettatonとの戦いの後に何もすることができなかつたけれど。

それでもボクは前に進んだ。

Victimに外を見せる為に、ボク自身がそうやって納得できるように。

Monsterみんなと友達になって、一緒に地上に出て暮らせるように。

そう思ってたどりに着いた王城では、ひとかけらの慈悲も許されることはなかった。どれだけ戦いたくないって言っても、Asgoreは聞く耳を持つてくれなかった。

——だから、こうするしかないんだ。

頭ではわかっているはずなのに、木の枝を握る手が震える。これまでは絶対にFIGHT傷つけるなんてしてこなかったから、どうしても怖気づいてしまう。

腰の引けた攻撃とも呼べないような攻撃でも、確かにAsgoreに少しずつダメージが入っていた。

塵も積もれば山となるって言葉があるみたいに、ボクの攻撃は徐々にAsgoreを蝕んで、最後にはAsgoreの話を聞くことのできた。

ボクは、それでも許すことにした。間違つてなんていないことは、わかったから。これからを変えていけばいいって、そう思ったんだ。それなのに——

Asgoreの周囲に見覚えのある魔力でできた弾が産み出される。そしてその弾はAsgoreの体を砕き、あらわになったソウルまでもを砕いてしまう。

何が起こったのかわからない中で、地面からFloweyが顔を出す。そして、確かにボクに顔を向ける。

「フフフ」

Floweyは笑って、ボクを見ている。

一体何が面白いって言うんだ。ボクの目の前で、同じMonsterを殺して、なんで笑っていられるんだ。

「やっと理解したみたいだね。この世界は——」

どこからともなく六つのソウルがFloweyに向けて飛んでいく。

Floweyもそれを気にすることなく受け入れて……。そして、ボクにハッキリと告げる。

「殺すか、殺されるかき」

ゲラゲラと笑う声が聞こえて、視界が白に染まる。何も見えなくなって、少し目を瞑る。

そしてもう一度目を開くと、そこはどこもかしこも真っ暗な世界だった。

『……どこだろうね、ここ』

「Floweyがソウルを取り込んで、どうなったのかもわからないし……」

『警戒はしておこうよ』

Victimがボクにそう忠告を示してくれる。

確かに、そうするべきだ。ここまで闇に支配された場所なんて、いっどこから何が襲ってくるのか分かったものじゃない。

そう思っただけを見渡してみると、奥の方に見覚えのある光が見えた。

Victimには見えないらしいけれど、ケツイの光だ。あそこに行けば何か分かるかもしれない。

そう思っただけを警戒しながら近づいていく。そして、そのケツイにいつものように触れて——

そのケツイの光が、砕かれてしまう。

そして、とても大きなFloweyの顔が現れる。とっさのことに

驚いて後ろへと飛び退くけれどFloweyはお構いなしに話を始める。

「ハロー！ Floweyだよ。お花のFloweyさ！」

無邪気に笑いながら。

「キミのおかげで本当に助かったよ。」

子供みtainな明るい声で。

「キミがあいつを痛めつけてくれたからね」

言葉を紡ぐ。

「ボク一人だったら、絶対かなわなかった」

残酷な、言葉を。

「キミのおかげで」

一瞬、Asgoreの顔にFloweyの顔が変化する。

「あいつは死んでくれた」

確かに見えたはずのAsgoreの顔が崩れる。

そして、その顔もすぐに消えて白い歯を見せて笑うFloweyの顔が現れる。

「ニンゲンのソウルも手に入ったしな！」

ケタケタと、Floweyがボクを嘲笑う。

「はあく！ ボクはもう随分長いことカラッポだった」

「ソウルが手に入って最高の気分さ」

Floweyが嗤う。

「うふふモゾモゾ動いてくすぐったい…」

「あれ？ 仲間外れで寂しい？」

「でも、それならちようどよかった」

「まだソウルは6つしか手に入っていない」

「だからもう1つ必要なんだ」

嗤う。

「あと1つ手に入ればボクは”神”になれる」

神。その言葉にボクとVictimはつい反応してしまう。

「そして新しくみにつけた力で…」

「モンスターにも…」

「ニンゲンにも…」

Floweyはボクたちの様子にまるで関心を示さずに言葉を続ける。

「みんなに思い知らせてやるのさ…」

Floweyの顔が陰に染まって見えなくなる。その中で目と三日月のように開かれた口だけが怪しく光っていた。

「この世界の本当の姿をね」

また、Floweyがケタケタと嗤う。

そして、訳の分からない話が始まる。セーブファイルだの、なんだの何を言っているのかまるで分らない。

そうだとしても、とても邪悪な考えであることはひしひしと伝わってきた。

そんなことをさせないために、一步前へ踏み出す。

「ボクを止められると思ってるの?」

Floweyの顔が大きく歪む。口からは鋭い牙とぬらりとした舌が見える。目は大きく見開かれて、ボクをとらえている。

まるで獲物を逃さんとする捕食者だ。

「フッフ…。キミは本当にバカだね」

困ったような顔で、Floweyはそうボクに告げる。

けれど、もう絶対に揺らがない。目に見えるものじゃなく、ボクは胸の中にケツイを抱いたのだから。

今は、絶対にFloweyを止めて見せるっていう、ケツイを!

そう思ったボクの目の前に現れたのは巨大な影だった。

とても大きな、大きな影だ。

正面にはまるでテレビのような箱があり、そこにFloweyの顔が映し出されている。その箱からはいくつかの管と、棘の生えた植物の茎のようなものが四方に伸びている。

『……怖気づいてなんて居られないよ。さあ、覚悟を決めよう』

「うん、わかってる。……証明して見せる。ボクのケツイを」

「*▽◇×☆ is filled with Determination」

Neutral—8 The final battle (最後の戦い)

ケツイを決めたボクたちの前に現れたその怪物は、これまで出会ってきたMonster達の比じゃない明確な殺意をボクに向ける。

ギリリと目玉がボクを睨む。すると白い魔力の塊がボクに向けて飛んでくる。慌てて避けようとするけれど、前にも弾幕を張られてしまふせいで急ぎすぎるわけにはいかない。

撃ち止めになったことに安心して怪物の方に目を向ける。

今度は、ボクの番——

『右、危ない!!』

考えを巡らせ始めた所でVictimの叫び声が聞こえてきた。

何のことだかわからずに右を向けば、ピンク色の塊がボクに強かに撃ちつけられる。けれど一度では終わらず、大量に飛んでくるピンク色の塊をVictimの助言を受けながらもなんとか避ける。

どうやら、まだ目の前の怪物は攻撃の手を止める気はないらしい。そうしてピンクの弾幕も止まり、今度は警戒を緩めずに前を向く。すると大きな金属の塊から炎が噴き出て襲ってくる。

交互に火を噴くその穴から逃げながら、どうにか一手だけ攻撃を与える。

Asgoreとの戦い以上に余裕がなくて、全力で殴りにかかったにも関わらず目の前の怪物はとても余裕そうだ。

「あれれ？ その程度なの？」

「うるさいッ!!」

目の前の憎たらしい顔をした存在の攻撃はどんどんと激しさを増す。

段々と避けることが難しくなってきた所でけたたましいアラートが鳴り響いた。大きな攻撃でも来るのかと前を見れば、Warning^告がなされている。

その文字の下には水色をしたハートが描かれている。

『一体何——』

「Victim!？」

途中で途切れた声に驚いて周りを見渡せば、そこはさっきまでいた場所とはまるで違っていた。

同じように暗闇に支配されてはいるけれど、そこにあるのは水色のハートの描かれた画面と遠くから迫ってくる沢山のナイフしかない。

「——ッ！」

どうにかナイフを避けるけれど、それしかする余裕がない。Victimを探すために周りを見るどころか攻撃をするような余裕なんて見当たらない。

Victimがいないという事実には焦りながらも、どうにか隙間を見つけてそこに潜り込む。そして周りを見て、叫ぶ。^{A C T}

「*▽◇×☆ called for help……」

すると、どういうわけか沢山あつたはずのナイフがガタガタと震えたかと思えばそのまま絆創膏に置き換わる。

余りにも予測のできない変化に目を白黒させていたせいでその絆創膏に触れてしまう。しかし痛みはなく、むしろ負っていたはずの傷が治っていく。

前の方を見れば、水色のソウルがボクを見つめていた。

「*▽◇×☆ is filled with Patience。」

託されたそれを胸に秘める。すると今度は目の前の景色が切り替わってさっきまでいた怪物がボクを見る。

『ねえ、急に立ち止まってどうしたの……?』

「……少し、話をしてみた」

攻撃だつて激しくなっている。けれど、耐えられる。

耐えている内にまたアラートが鳴り響いて、今度はオレンジ色のソウルがボクを見る。頷いて返せば、今度は遠くからたくさんの拳がボクに迫ってきた。

避けて、避けて、避けて——そして、声をあげる。

「*▽◇×☆ called for help……」

するとオレンジ色のソウルがボクをしっかりと見つめて、さっきま

で襲ってきたはずの拳がボクの背中を押すものになる。

「*▽◇×☆ is filled with Bravery.」

また景色が切り替わって怪物が現れる。攻撃の間を勇気を持って走り抜けて、握りしめた武器を振るう。

すぐにまた攻撃が飛んでくるからどうにか避けている合間にVictimがボクに向けて叫ぶ。

『立ち止まったりしたら危ないって!』

「大丈夫だよ。ボクは——」

言葉が掻き消える。

頭の中を揺らされるような感覚に思わず足を止めそうになるけれど、どうにか攻撃を避ける。

『立ち止まったりしたら——って大丈夫!?!』

「何、今の」

とてもじゃないが、愉快とは言えない感覚だ。全部をなかったことにされて、かと思えば無理やり元の状態に戻される。

頭を振って嫌な感覚を振り払おうとしている内に、もう一度頭の中を揺らされる。

一度経験したから、何が来るのかはわかる。けれどなれることの無さそうな感覚に襲われて、どうにももうまくいかない。

『ちよつと、本当に大丈夫!?!』

「うん、もう——」

言葉をアラートに塗りつぶされる。前を見れば青色のソウルがボクを見る。

心構えを新たにすれば、星が頭上に敷き詰められて、目の前からはバレエシューズがボクを踏みつぶそうと列をなして襲ってくる。

シューズが上がった瞬間を狙って潜り抜けて、一息ついたところで声をあげる。

「*▽◇×☆ called for help……」

すると今度はバレエシューズが空に消えて、星がきれいな音を奏でる音符に変わる。

青色のソウルに認められたことをはつきりと認識して、絶対に約束

を守るという誠実さを思い出した。

——Monsterとはお話をすれば分かり合える。

ボクが一番最初に聞いたことだ。それを忘れるなんて、ボクはダメだな……。

「*▽◇×☆ is filled with Integrity.」

前を向く。目の前にいる怪物はボクが未だに立っていることにも不満があるみたいだ。そんな顔をしている。

けれど、ここで倒れるようなことは絶対ない。絶対に、Floweyと話をして、ちゃんとお友達になるって決めたから。

『——急に何もなくなるの怖いからやめてよ!!』

「アハハ、ごめんね」

どうやらあのソウルたちと会っている間に随分と心配をさせてしまっているらしい。けれど、これでようやく半分なんだ。

まだまだボクはやることを終えていない。

前を見れば、アライトが鳴り響いて紫色のソウルに見つめられる。

視界が切り替わって、今度は左右から本に挟まれてその本から聞いているだけで嫌になってくるような言葉が聞こえてくる。

そんな言葉たちを聞かないようにして、そしてボク自身の声で掻き消す。

「*▽◇×☆ called for help……」

紫色のソウルがボクを認めてくれて、胸の内にある熱をより大きなものにする言葉を贈ってくれる。

その言葉を胸にしまつて、怪物を——Floweyを見つめる。

Floweyはボクに向けてなんで死なないんだってボクに文句を垂れる。

「*▽◇×☆ is filled with Perseverance.」

そんな言葉には絶対に屈さない!!

攻撃を続ける。何度も何度も頭の中を掻き乱されるけれど、そんなことに構っている暇はない。

目の前にあるものをどうにかすることだけ考えていけば、少しマシンになる。だったらそうして進んでしまえばいい!

『さつきからなんだか変なんだけど……』

「みんなの想いを汲んでるんだよ」

訳の分からなそうな顔をしているVictimについて笑ってしま
いそうになるけれど、アラートが鳴り響いて気を引き締める。

今度は緑色のソウル。なんだかボクを心配そうに見ているような
雰囲気を感じる。

目の前に広がるのはただ真っ暗な空間。けれどなにかの焼けるよ
うな音がする。

おかしいな、なんて思っている間に目の前に炎が落ちてきた。慌て
て上を見れば熱されたフライパンから炎が降ってきている。

慌てて避けていけば、どうにか一呼吸おける場所を見つけることが
できた。そして、叫ぶ――

「*▽◇×☆ called for help……」

すると緑色のソウルは決心した様子でボクに卵焼きをフライパン
に乗せて差し出してくれる。

どうやら、認められたようだ。

ボクの胸の内を緑色のソウルが差し出してくれた優しさが包む。

「*▽◇×☆ is filled with Kindness。」

視界が戻れば、ついに残りは一つだ。

真っ直ぐとFloweyを見つめれば、少したじろいだ。どうやら
ここまでの勢いに少し押されているらしい。

『もう好きにしなよ……』

「あー……こればかりはどうしようもないかな。ごめんね」

ちよつとふてくされてしまったらしいVictimに謝るけれど、
それだけの人らしさが現れていることに少し嬉しくなる。

けれどそんな考えもひととき大きなアラートに上書きされてしま
う。

ボクを見てくるのは黄色のソウルだ。これまでで一番ハッキリと
見られている。

視界が切り替われば、目の前でボクに向けて銃口を向けられていた。

そのことにぎよつとしながらも反射神経だけで避ける。そして一度鳴り響いた空砲の間にボクの胸の内を叫ぶ。

「*▽◇×☆ called for help……」

黄色のソウルが少し微笑んだかと思えば、ボクに向けて銃口からクローバーを贈ってくれる。

確か……”幸運”のほかに、”希望”の意味のあるものだ。

ボクの中に秘められた確かな信念が更に固いものになる。

「*▽◇×☆ is filled with Justice.」

そして、ボクを認めてくれたソウルたちがボクの周りを回って、それぞれがボクに想いを託してくれる。

その思いを改めて受け取って、ボクの内側で更なるケツイが沸き上がる。

「*▽◇×☆ is filled with Determination.」

——さあ、前に進もう。

どこからともなく聞こえたその声を聞いたところで、ボクはまた戻される。

けれど、目の前のFloweyは確かにおかしくなっていた。

攻撃がさつきよりも深く刺さるし、攻撃そのものは激しくなっているけれど、重みがまるで違う。

こんなもので、ボクの想いが。ボクのケツイが、負けるはずがない
!!

ボクの全てを込めて、最後の一撃を振るう。そして目の前でFloweyが崩れ落ちて——

Neutral—9 FINAL

Floweyが崩れ落ちる。恨みを込めたような目で、ボクを見る。

「そんな……いやだ！ こんなことあつてたまるか!!」

体の色んな所に傷をつけられて、全部を否定するように叫ぶ。

「お前……オマエ……」

けれど、ボクに向けていた恨みが唐突に嘲笑へと切り替わった。

その瞬間にまた頭の中を揺さぶられる。けれど、今度は戦闘中に起きたような軟なモノじゃない。もっと大きなものだ。

記憶が一度すべて消えて、なかったことになる。それなのにボクは記憶を持つている必要があるから一度まっさらに消えたはずの記憶を無理やりまた引っ付けられる。

わかっているのに何もできない、気持ち悪いのにどうやっても治せないその感覚はまさに最悪って言っている。

それだとしても、止まるわけにはいかない。

『さあ、覚悟を——』

一度聞いた声が入る。

前を見れば怪物となったFloweyが無傷でボクを嘲笑っている。

「フッフ……。そう言えばキミ、あのもう一人のニンゲンはどうしたんだい？」

余裕の表れなのか、Floweyはボクに対して言葉の刃を向ける。

「あれあれえ？ もしかしてもう死んじゃったのかな？」

言葉がボクに対して飛んできて、ボクを打ち倒そうとする。

「だったらボクがちゃんとしてソウルを回収してあげた方が良かったかなあー!!」

ゲラゲラと下品に笑うFloweyを真っ直ぐに見据える。

そこまでされてFloweyはようやくわかったみたいだ。その言葉の刃は、ボクに確かなケツイを抱かせるだけだったことが。

「な、何なんだよその目は——」

『……………私のソウルはキミに預けたんだ。あんな奴に取り込まれたりなんてしないよ』

ボクのケツイはまた、かつての戦闘が始まるときと同じように……いや、託されたものがあるのだから、それ以上に漲っている。

「そんな目をしたところで今更——!!!」

Floweyがボクを囲うように植物のつるで囲む。そして攻撃が確かにボクを貫く。

けれど次の瞬間には巻き戻される。そしてまたボクが攻撃を受けて、すぐに戻ってくる。

確かに”死んで生き返ってまた死ぬ”というのは途方もないようなことなんだろう。けれど、そんなのじゃ足りない。

ボクを絶望させるには。ボクを嘲笑うにしても、全くもって足りるわけがない。

ケツイが死にかけているボクを動かす。そんな僕の周りを最初に見た白い魔力の弾が囲む。

なんて言われようと、ボクは立ち続ける。何をされても、何があっても！

ボクのケツイを表すためにも、一歩、前に出て叫ぶ。

「*You called for help」

Floweyがボクを見て大きく笑う。

白い弾がボクに向けてゆっくりと進んでくる。隙間なんてないし、避けることもこの体じゃできるわけがない。

——それがどうした。

確かに進める道なんてない。けれど、それはボクが止まる理由にはならない。

ボクは、こんなところで立ち止まるわけにはいかない！

これまでに何度も抱いてきたケツイを、更なるケツイで上塗りする。そうやって積み重ねてきたボクのケツイがボク自身を動かす。

一歩、前へ進む。弾が迫ってきていることなんて構うものか。その程度で立ち止まるわけがない。例えば弾に当たったとしても、たどり着

いて見せる。

『…………ごめん』

「……………は？」

Floweyがボクを見て確かに驚きの声をあげる。ボクも、目の前の事実が分からなかった。

ボクの中から飛び出たソウルが、ボクの代わりに白い魔力の弾を受け止めたのだ。

『キミは、生きて……』

たったそれだけの言葉を残して、ソウルがバキバキと音を立ててひび割れていく。

Floweyの言葉なんかよりもよっぽど大きな衝撃がボクを襲う。

「……………ああ。あのニンゲンのソウルはキミが持ってたんだ。安心しなよ、こうすれば……………」

Floweyが力を使って、世界を撒き戻そうとする。Victimの覚悟を無視しようとする。

そんなこと、許せるはずがない。

確かに巻き戻せばVictimは生き返るってことになるだろう。でも、そんなことじゃあ今この場にいたVictimの覚悟はどうなるんだ。

自分が死ぬとわかっていることをするなんて、まったくもってあの子らしい。けれど、そのために必要だった覚悟を……当事者以外が嘲笑うなんてあっていいはずがない。

世界が全部をなかつたことにしようって言うのなら、そんな流れにボクは逆らってやる。巻き戻すなんて許さない。

「*Determination」

「な……力が使えない!？」

目の前にいるFloweyが狼狽える。

ボクのケツイに共鳴したのか、ボクに託してくれたソウルたちがFloweyに逆らう。そして、それぞれが自分の想う信念を持って動く。

Floweyは自分が完全に支配したはずのソウルが自分に牙を向けたことが納得いかないみたいで子供みたいに叫んで、駄々をこねる。

けれど、もう遅い。

完全にソウルたちがFloweyとのつながりを断ち切って、Floweyがソウルたちの力を使うことでとどめていたエネルギーがすべてあふれ出て視界が真っ白に染まる――

Neutral—End これでおわり？

ボクの視界を真っ白に染めていた光が収まる。

目を開く。すると目の前には、変わらない真っ黒な空間が広がっていた。その中に、見覚えのある黄色い花が頭を垂れて咲いていた。

体に傷を負わされた黄色い花。お花のFlowey。

ボクには二つ、取れる行動がある。

ここで動くことのできないFloweyを倒してしまうか、それとも許して友達になるのか。その二択。

けれど、ボクのとる行動はもう決まっている。

確かに、FloweyがVictimの命を奪ったことは許せない。い。

「……何見てんだよ？」

Floweyがボクを見つめる。こうしてボクが何もせず立っていることが不可解なようでボクを睨んでいる。

「ぼくが反省したとでも思うわけ？ ハッ……まさか」

ボクのことを鼻で笑ったと思えば、Floweyはまた顔を伏せてしまう。そんなFloweyにボクは目線を合わせるためにしやがむ。

……まだボクの方が目の位置が高い。

「ボクを見逃したってなにも変わらない。終わらせたいならとっとボクを殺せよ」

伏せられていた顔がボクをまた睨みつける。

関係ない。ボクはもう決めたんだ。Floweyと友達になるってことをすでに。

「ボクを生かしておいたら……。また戻ってくるよ」

ボクを見ていた顔が歪む。ゆっくりと顔が上がってきて、ボクをハッキリと見つめる。

「キミを殺しに」

構わない。

「皆を殺しに」

Floweyの顔が凶悪そうなものになる。

けれどそんなことは関係ない。ボクのケツイは、すでに決まってる。

「キミの大切な人を皆殺しにね」

その言葉によってVictimの顔が思い出されてしまう。

とりあえず一発だけ、デコピンを空振りさせる。びくりとFloweyが体を縮ませる。その姿がなんだかおかしくて少し笑ってしまう。

Floweyにずっと、ボクは話しかける。

この地下世界であった話を続ける、Floweyと友達になるために。

「どうしてそんなに……優しくするのさ？」

「ボクはキミと友達になるって、決めたから」

それが、Torielさんとした約束だ。

逃げるんじゃないなくて、戦うわけでもない。お話をして、友達になる。

そうやって、皆と友達になるって決めたから。

「……バカじゃないのかい？ 何度も何度も殺されて、それでも友達になろうなんて!!」

「友達になりたいからだよ。ボクは、キミと友達になるって、もう決めたんだ」

確かにFloweyはボクのVictimの命を奪ってしまった。けれど、そのための選択をしたのはボクなんだ。

ボクが時間を遡らせようとする流れに逆らったから、Victimはどこにもいないんだ。

「だからこそ、ボクはキミを許すよ」

「………ぜんぜん………わかんないよ……」

そう言い残してFloweyは地面に潜ってしまう。

慌てて止めようとしても、遅かった。けれど、きつとボクはみんなと友達になれた。そのはずだ。

そう思って、先を見つめる。その先にあるのは見慣れた太陽の黄昏の光。

地上とこの地下世界をつなぐ壁に手を当ててみれば、少しの抵抗感を感じるけれど通り抜けることはできそうだ。

ここを通り抜ければ、ボクは地上へと帰ることができる。

それが、ボクの本来の目的だ。けれどこの先へ向かうことが……友達と合うことができなくなるっていう事実が恐ろしくて立ち止まっている。

『……早く行きなよ。それがキミの目的だろ』

「——Victim!？」

思わず振り返った先にいるのはもう見慣れてしまった半透明のVictimだった。

けれど、ソウルはひび割れてしまったはずだ。それなのにどうして……。

『私はしぶといんだよ。こうして生に無理やりしがみつくだいにはさ』

その胸の中にあるソウルは、確かにひび割れてはいいたけれど、また形を留めている。

完全に壊されたわけではなかったみたいだ。Victimは死んでなんていなかったんだ。

「……でも、よかった。さ、一緒に」

行こう、って。そうやって伸ばそうとした手をVictimは振り払う。それどころかボクを両手で突き飛ばして、バリアの外へと押し出した。

信じられなくて、目を見開いてみたのは——

ボクに向けて優しく笑いかけるVictimと、その胸の中で静かに崩れていくひび割れたソウルだけだった。

Pacificist 1 まだ終われない

ボクは、ボクを許せなかった。

結局ボクがしたことなんてVictimを犠牲にして自分だけがあの地下世界から地上へと出た。逃げたただそれだけ。

そんな終わり方をして……かつて抱いた自分のケツイに嘘を吐くなんて、ボクにはできなかった。

だから、一度だけ。たった一度だけと決めてボクは戻ってきた。

この地下世界に、あの時の基準点セーブポイントに。

どうしたらいいのかは頭の中に埋め込まれている。原理なんて知らない。理由なんて知りたくもない。

だとしてもこれが皆で幸せになるためには必要なことなんだ。

『ねえ、どうしたの？ 急に立ち止まって——』

懐かしい聞きなれた声がボクに語り掛ける。

あり得ない当たり前なそのことが嬉しくてボクは勢いよくその子の方を見る。

変わっていない。何もボクの記憶の中のあの子と何も変わっていない。

「いや、少し用事を思い出してね」

『用事……？』

Victimは自分の記憶を漁っているのか、うんうんと唸っている。

ボクたちよりも先にあの部屋に入っていたAsgoreにも、一言告げてから一先ずボクたちは来た道を辿る。

もう、ケツイは済ませた。

『それで、何をするの？』

「Alphysに会いに行くんだよ」

『でもAlphysは……』

AlphysはMetatatonが動かなくなってしまったことで大きなショックを受けていた。確かにそれはそうだろう。

けれど、それが必要ってことを知ったんだ。

とにかく行こう、ってそう声をかけようとした時だった。

Alphysに改造してもらった携帯電話が音を立って震えたのは。何のことだから心当たりがまるでないままに電話に出てみるとUndyneからボクにお願いがあるらしい。

今のUndyneは確かSansとPapyrusの家にはいたはずだ。けれど必要なのはAlphysと合うことで……。

……でも、友達の頼みを見無視なんてできない。

『電話、どんな内容だったの？』

「Undyneからもお願いがあるんだって……」

『それでどっちに行こうかってこと？』

何と言うか、Victimはボクのことをよく理解し始めたらしい。その証拠に今も明らかに仕方ないなって感じてため息を吐いている。

Victimからしたらなんてことはないことかもしれないけれど、今のボクにはそんなことですら嬉しく感じられる。

そんな思いが出ていたのか、Victimはもう一度ボクにため息を吐いてくる。

『私の覚えてる限りだとAlphysとは約束をしてなかったよ』

「……やっぱり今約束した方が優先だよね」

『なんですつと一緒に居た私の記憶にないことをしようとしてるのは聞かないでいてあげるよ』

そこを突かれてしまうと痛いな……。けれど、聞かずにいてくれるVictimの優しさに今は甘えることにしよう。

Alphysには心の中で謝ってから、行き先を変更する。

目指すのはSnowdin。他でもないカミサマって存在のせいでVictimの体だけが取り残された雪の町だ。

……正直な話をするともあまり行きたくはない。

あの後何度かSansと会うことはあったけれど、どうしてもぎこちなくなってしまうていたから。

”あつちのガキンチョについてだが……。あつちのニンゲンは、最初から自分が死ぬってことを知っていたように見えた。だから、アン

夕は悪くない……。少なくともオイラはそう思うぜ”

審判を終えたS a n sから最後につけたされた言葉がボクの頭の中をよぎる。……悪いのは、カミサマって言う存在だ。それは確信を持って言える。

けれど、ボクは結局救えなかった。

今度は救って見せるなんて、そんな高慢なこととは言えない。けれども少なくともあんな結末にはしないって決めた。

そのために必要なら、気まずさなんて捨てなきゃいけない。

「……行こう」

今度は、皆と地上に出るんだ。

Pacificist—2 よりよい未来へ

それからホットランドでリバーパーソンというらしいMonsterにSnowdinのはずれにまで送ってもらおう。

このはずれから進んで、SansとPapyrusの家の前まで歩いて行く。二人はどうやら外で待っていていたようで、家の外で立って待っていた。

「やあ二人とも。それで……頼み事って？」

「少し、頼まれてくれないか」

もちろん、という意味を込めて頷くとUndyneが背中に隠していたらしい一つの便せんを差し出してくる。

「どうやらこの手紙をAlphysに届けなければいいみたいだ。……けれど、自分で行こうとは思わないのだろうか？」

そう思っていることが顔に出たのか、それともPapyrusが声に出したのが原因か。それはわからないがUndyneは赤くなってもじもじとしている。

「し、正直に言う……」

ワクワクとする心を隠せずにいるせいか、後ろにいるのだろうかVictimが呆れたようにため息を吐いたのが分かる。

……いくらなんでも久しぶりだからって少しテンションが上がりすぎていたのかもしれない。この少しの時間だけでこれまで地下世界を歩いたときに吐かれたため息の数に並んでいる気がする。

そんな風に一人で勝手にテンションが上がって下がってという変化をしているという事はつゆ知らず、ついにUndyneが本音を叫ぶ。

「Hotlandはクツツソ熱い!! 自分で行きたくないんだよな!!!」

……確かにあのHotlandはとても熱い。鎧を着て直前まで激しく動いていたとはいえUndyneがダウンする程度には熱かった。

となれば、それも仕方がないのだろう。そう思って改めて了解する

と中身を見ないように念を押されはしたがすぐに送り出してくれた。中身を見る気は最初からないが、そこまで否定されると少し気になってしまうのがサガというもの……。

『まさか開くつもり？』

「……アハハ、そんなことしないよ」

そうだった。独りになんてなれないんだから内緒で開くってこともできないんだった。

まあでもこればかりは仕方がない。早々に諦めてまたリバーソンさんに頼んで今度はH o t l a n dまで来た道を帰る。

そしてラボの中に入りはしたが……。

『ポスト、無いね』

「うーん……どうしようか」

そう、なんと手紙を入れるところがなかったのだ。

ラボの外にも中にもポストらしきものは見当たらない。くまなく探してみたけれどやっぱりどこにも赤いポストは見当たらなかった。

どうしたものかと途方に暮れていたところでA l p h y sのいるのだろう場所に続く扉が見える。よく見てみると下の方に少し隙間があるみたいだ。

多分、ちようどこの手紙が通るくらいの隙間が……。

「なるほど」

『ねえ、キミまさかそんなことしないよね……？』

「それー」

『ちよつと！ それU n d y n eの大切な手紙だろう!？』

隙間から手紙を入れて差し出してみる。その行動はV i c t i mの怒りに触れたようだが、代わりにA l p h y sは手紙に興味を持って近づいてきたようだ。

その反応にボクがポストのことを手紙を入れる場所、と説明したせいかもしれないけれどV i c t i mは扉の隙間から手紙を入れることも正しいことなのかと悩んでいる。

安心していいよ。正しくなんてないから。

そんなことを思っている間に気が付けばA l p h y sが扉から出

てきていた。それから止める暇すらないほどに目まぐるしい話の飛び方になんだかわからなくなっている間にどうやらデートする為にゴミ捨て場に行くことになったようだ。

「さあ、ゴミ捨て場に行きましょう!!」

『ポストは手紙を入れるところで……。でも扉の隙間から入れても問題ない……。? じゃあ扉の隙間はポストなの……。?』

「……………アハハ」

とても混沌とした空気が漂っている……。

混沌とした空気の中で始まったAlphysとのデートは何とも
言えない結果に終わった。

そもそもAlphysとのデートはデートとは呼べない者だった
のだ。

まずもってAlphysが想いを寄せる相手はすでに決まってい
た。

そして相手が決まっている以上、ボクとのデートは酷いものだっ
た。好感度を上げると言って渡されそうになったアイテムはすべて
その相手のための物。

連れていかれたゴミ捨て場で問い詰めてみたらついに相手が決
まっているという事を告白されてしまった。

だったらなんでボクなんかとデートしたのかとか、いろんなことを
話した。そうした中でAlphysは自分は嘘だらけなのだと言っ
ていた。

ボクはAlphysのために真実を話すように諭した。

自分のことを棚に上げて「真実は話すべきだ」ってそう言ったんだ。

ボクはVictimの疑問に答えてなんかいない。誤魔化して誤
魔化して、そうして何も聞かないでいてくれるVictimの優しさ
に甘えているだけ。

それだつて言うのにボクはAlphysに真実を話せつていうん
だ。ボク自身が行つていない事をしろつて、言ったんだ。

走り去つていったUndyne達を眺めながら漠然と思う。やっ
ぱり話すべきなのかなつて。

一度Victimがボクの為に死んでしまったこと。それが嫌で
やり直しを選んだこと。

全部話して、その上で……お願いをするべきなのかもしれない。一
緒に地上に出るといふ事を改めて。

「……………」

少し歩きながら口を開こうとした時だった。

急にボクの電話が鳴り響いた。出鼻をくじかれながらも電話に出てみれば P a p y r u s から研究所にいる A l p h y s に会いに行つて欲しいつてことみたいだ。

なんでまた A l p h y s なのかとか聞きたいことはあるけれど一先ずは行く方がいいのだろう。

『……？ いま何か言いかけてなかった……？』

「アハハ、何でもないよ。ボクはいつも通りさ」

結局、ボクは本当のことを言うのをやめてしまった。

最初つから言うつと決めていれば電話位で意思が変わるはずなんではないから、きつとボクは何かしら理由を着けて言わなかったのだからうって、そう思う。

……いいや、こんな弱い気持ちでいたらいけない。今は、先へと進もう。

『……。別に無理に聞き出そうなんてしてないからいいんだよ。言いたいときに言つてくれればね』

「………ツ。ごめん、ありがと……」

V i c t i m の優しさがボクの良心へ訴えかけてくる。いや、本人からしたらそんな意識はないのだろうけれど。

中途半端なボクの想いが勝手にそう感じているだけだ。『話してしまいたい』という気持ちと『話をして』という気持ちがせめぎ合つて、変なところで止まっているせいで『いつそ V i c t i m が聞き出してくれたら』つて考える自分勝手な考えをしているからだ。

だったら、その気持ちに整理がつくまで。今だけはただその想いにまとめて蓋をしよう。

「……H o t l a n d まで、お願いします」

「トウララー、お任せをー」

一先ずはこの場所に想いを置いていくことに決めて、ボクはその船に乗り込む。

「トウララー、川の水があばれてる。これはとっても不吉です……」
船で川を渡っている最中に言われたその言葉がボクの耳に嫌に残る。

……一体何があるのかとびくびくしながらも何度か入ったことのあるラボへと進む扉を潜る。けれどそこにA l p h y sの姿はなかった。

代わりに何かメモのようなものが置かれている。

「やあ。ずっと助けてきてくれてありがとう。皆……そしてあなたもいつも私を助けてくれる。

だけど……これって本当に言いづらいんだけど……あなた達には、とてもじゃないけど私の問題は解決できないわ。

私はもつともつといい自分になりたい。これ以上恐れることなんてしたくない。そしてあの事についても、私は自分の過ちと見つめ合わなきゃいけない。

私は今からそれに決着をつけます。

全てをはつきりさせたい。

これは他でもない私の問題。

けどもし直接私から伝える機会がなかったら……そしてあなたが「すべての真相」を知りたいなら。この手紙の北にあるドアの中に入ってください。

あなたには真相を知る権利があると思うから」

「これって……」

『あの扉、だよね』

V i c t i mの言葉の通り、きつと扉というのは今ボクたちの目の前にある、これまでに一度も入ることできなかった扉だ。

近づいてみるとセンサーに感知されたみたいで扉が開く。中を覗いてみればそこはエレベーターになっていた。ここから繋がる場所に行けばいいのだろう。

中に入ってから下降するボタンを押してみると扉が閉まって一瞬ふわつとする感覚の後にエレベーターが降りていくのを感じる。

まだ少ししか降りていなかったというのに、急にエレベーターの中で赤いランプが輝いて、警報が鳴り響いた。

《警告！・警告！・動力低下！・巻き上げ機停止！・高度低下！》

スピーカーから吐き出される音声はそんなものだ。

どうすればいいのかもわからずにあたふたしている間にエレベーターが緊急停止したのか、止まって扉が開かれる。

外に出る前にエレベーター内で何かできやしないかとボタンを触ったりしてみるが反応がない。どうやら本当にエネルギーが無くなっているようだ。

『……一先ず外に出ても問題なさそうだよ』

「あ、そうなんだ」

壁からにゅつと顔だけを外に出していたVictimがボクに外の様子を教えてくれる。

……Victimがこうしてボクとは違う視点で見られるおかげで助かっていることもあるけれど、そういう動きはボクにVictimはもう死んでしまっているという事を突きつけるだけだから出来ればやめて欲しいんだけど……。

ボクも嘘をついているんだし、このくらいは仕方ないって受け入れるべきなんだろう。

「……電源つてどこにあるんだろうね」

『頑張つて歩いて探すしかないだろうね』

「だよねえ……」

出来れば早くAlphysに会いたいけれどそういうことなら仕方がない。Alphysに会いに行くためにも、今は一先ず外に出て電源を探さなければ。

想像以上に暗くて怖いエレベーターの外の雰囲気ビクビクとしながらもボクはそんな想いを抱いた。

真実のラボ。

まさしくそう呼ぶべきその場所には口にしがたいような事実が眠っていた。

全ての事の始まりはきつと、初めて地下世界に堕ちてきた一人のニンゲンだった。

……それから、ボクの持っているこの力についても、ようやくわかった。

ケツイ。死に抗おうとする力。自分の想いを実現させるために現実を、世界を力づくで捻じ曲げてしまう力。

そして……何よりもA l p h a s が隠したかった事についても、初めて知った。

M o n s t e r は死ぬと塵になる。それはもう見た知らなかった。その塵にニンゲンの力の源である生きる意志^{ケツイ}を注ぎ込む。そうして無理やり生き返ることになったM o n s t e r 達。

その姿はボクのケツイを静かに、しかし確かに濁らせていった。だってV i c t i m は、もう死んでしまっている。物に触ることができないことは知っている。

ずっと何かに触ることもできずに、見られることもなく。ただ蚊帳の外に置かれて、ずっとそこにいるだけ。

何もできずに、ただそこにいるだけ。

もしもV i c t i m と外に出ることができても、それはV i c t i m にとってどうなることか。

ボクがそうしたいって思っただけでV i c t i m からしたらただの迷惑なのかもしれない。考え始めたらきりのない思考が頭の中をグルグルと駆け巡る。

けれどボクの思考は同じ所をグルグルと回っているだけで答えに進もうとなんてまるでしていない。

「……ねえ、V i c t i m 。これで、いいのかな」

主語のない言葉は意味のわからないものにしかならなかった。

けれど、そうだとわかっていてもボクにはそんな言葉にしかできなかった。

何がいいのか、まるで分らない言葉にしかなくていいのに、それでもVictimは答えてくれた。ボクが何を言おうとしていたのか、Victimにわかったのかはわからない。

それでも、Victimは答えてくれた。

『いいんだよ。さあ、進もう。もう私たちの未来はそこにあるんでしょう？』

進もうって。未来は、そこにあるって。

進んでもいいんだって、言ってくれた。ボクが何を考えていたのかを知っているわけではないのかもしれない。

けれど、それでもいいって思えた気がした。

「——行こう！」

もう一度、ケツイを固める。

そうだ。ボクがVictimにそんな思いをさせないようにしてしまえばいいんだ。

Victimに良くない考えを抱かせてしまうって言うのなら、ボクがその考えを抱く暇もないほどに幸せにしてしまえばいい。

そう、簡単なことだったんだ。

何か良くないことがあるって言うのなら、他でもないボクが自分で変えてしまえばいい。

だから、大丈夫。

心の中で燻っていた不安を拭いて、ボクはまたケツイによつて満たされた。

【* HOPE】

一步を踏み出してエレベーターに乗り込む。すると急にボクのポケットに入っていた電話が音を立てて震える。

慌てて見てみるがその番号に見覚えはない。

急に誰かが番号でも変えたのかと思つて出てみても、その声に聞き覚えはない。

訳のわからない話題についていけないでいる間にも声の主はほとんどと話を進めていく。

そうして、ついていけないってそう思つた瞬間だった。ボクはボタンを押したりなんてしていないのに急にエレベーターの扉が閉まってしまう。

V i c t i m はものに触ることができないからボタンを押したわけがない。それだというのに急に扉が閉まり、それどころか紅いランプが光り、エレベーター全体がぐらぐらと揺れる。

「……………止まった？」

『……………丁寧に扉まで開いてるよ』

動きを止めたエレベーターから出て行けばエレベーターの扉が閉まり、さらに植物のつるがそれを覆ってしまう。

突然の事で目を白黒させている内にもそのつるは完全にかつちりとエレベーターの扉を封じてしまった。試しに力を入れてみるが、太くてとてもじゃないが切れそうもない。

……………どうやら、引き返すことはできないらしい。

『さっきの電話と言い、なんなんだろうね』

「それはわかんないけど、行くしかないってことはわかるよ」

見据えるのは一度通つた道。けれどあの時とは違う道。

そこに見えるものは変わっていない。けれどそれを見ているボクが変わっている。

A s s g o r e の住んでいたであろうNewHomeを通つて、S a n s の審判を受けた最後の回廊を通つて。それから……………ボクに託してくれた他の子たちのいるあの場所によつてから、先へ進む。

『……進む前に一つだけ。一つだけ確認させて』

「なにさ、急に」

Victimの唐突な言葉に足を止めて顔を合わせる。

真剣な顔をしたVictimが真っ直ぐボクを見据えている。

……多分、本当に確認をしたいことなんだろう。

『心残りとか、ある？ 多分、本当にこの先は引き返せないって気がするから確認したくて』

「――」

……引き、返せない？

息が詰まる。あり得ないって、そう安直に断じてしまいたいけれどVictimの真剣な瞳がボクを貫く。

世界は、巻き戻されたはずだ。それなのにどうしてVictimはこの先で”引き返せない”って感じたんだ？

ボクは巻き戻したなんて一言も言っていない。それだということになんだってそう思えたんだ？

『……ねえ、心残りがあるならまずはそれを終わらせなきゃいけないんじゃない？』

「……………ううん、大丈夫。後悔は、ないよ」

考えても答えなんて出てこない。

ただ”何となくそう感じた”だけ。そうだとしてみきつと覚えていられるのだろうか。

ほんの少しの欠片だけ、残ってしまったんだろう。

……だから、Victimはそう感じたのかもしれない。

「後悔はない」

確認するようにもう一度呟く。

そう、後悔はない。心残りがないとは言い切れない。最後にTorielさんにVictimの事を謝るべきだろうし、それ以前にVictimにこの世界のことを話してしまうべきなのだろう。

けれど、その選択をしたことに後悔はない。それが最善だって、ボクは信じている。

だから後悔はない。

一步、A s g o r eのいるその場所へと足を踏み出す。

絶対にみんなと地上に出るといふ決意をもって、最後の戦いに身を投じる。

「おや……随分早かったね?」

A s g o r eはボクたちが来たことに気付いたのか、背中越しにボクに声をかける。

「満足したかい?」

大きく頷く。ボクにはもう後悔はない。

引き返す道も、きつともう残っていない。

「ボクたちは、地上にでます」

「……………わかった……………」

A s g o r e王が重々しく口を開く。

ここに居るのはただのM o n s t e rじゃない。M o n s t e rの王なのだ。その威厳が、圧がボクたちにのしかかる。

「準備はいいかい?」

地面から七つの容器が顔を出す。一つだけ空っぽの物があるけれど、中にあるのはかつてボクに想いを託してくれたニンゲンたち。

……………最後の戦いが、始まろうとしている。

強いわけでもなく、弱いわけでもなく。けれど確かな力を持った光が辺りを満たす。

結界の向こう側から、地上の光が差し込んでいる。きつと、この戦いで本当に終わりなんだ。

この戦いが終わればボクは二度と世界を巻き戻したりなんてしない。

——違う。きつと、できなくなるんだ。

けれど、そのためにはこの戦いを切り抜けなければならない。

そう思えば、ボクの胸の中でケツイがまた光を灯した。

「ニンゲンよ……」

重々しい口調でAsgoreが語りかける。

「君に会えて本当に良かった」

さようなら、と。そう言つてAsgoreは顔をうつ向かせる。それはボクの中の『MERCY』^{許す}っていう選択肢を奪うためのものだった。

許すなんて優しいことをいうことができないような、余裕のない完全な戦いの場を作るための物。

けれど、今回は違った。

ボクの目の前で音を立てて炎が現れる。

その炎はボクではなくAsgoreに向いて飛んでいき、そして彼を突き飛ばしてしまった。

まるで、この地下世界に初めて落ちてきた時と同じことが起きていた。

ボクがどうしようもなくなつてしまつて。そして、そんな状況を彼女は二度も打ち払ってくれた。

「なんて恐ろしい魔物なんでしょう。罪のない子供を、傷付けるなんて……」

懐かしい声だ。

最後に聞いたあの時から何も変わっていない。とても優しく、暖

かい声。

振り返れば、そこには見覚えのある彼女がいた。

「ああ、怖がらないでいいのよ。私よ、Torielよ。あなた達の方で保護者だわ」

その声に安心を覚えるよりも先に、その言葉にボクは固まってしまった。

彼女は、Victimがどうなったのかを知らないんだ。だからあなた達”って、そう言った。

「……あら？ もう一人の我が子はどこかしら……」

きよろきよろとTorielさんは首を回して辺りを見回す。けれどどこにもVictimの姿はない。

話題を変えるためにもどうしてここにいるのか、そんな何にもならない質問をする。帰ってくる答えはボクの予想通りに、ボク達を心配したから付いてきた、という事らしい。

本当に、優しいMonsterだ。

「——ここから抜け出すのに誰かが犠牲になる必要なんてないんだわ」

その通りだ。犠牲なんて必要ない。

必要は、無いはずなんだ。

……。Victimは、どう思っているのだろうか。思わずそう思っただ顔を伺ってしまう。

するとすぐにボクの視線に気づいて、ため息をつかれてしまう。

『必要がないことと、選択しちやいけないことは同一じゃない。必要がなくなったら、選べる道つてことに違いはないんだから』

そう言っただ、Victimは空中で体を反転させて上空を見上げる。

話は終わりだっただ、そう言われてるみたいだったからもう一度前を見ようとしたら、追加で言葉が聞こえてきた。

『まあ、私は自分で選ばなかったからこんなことになったんだよ。――

――キミは、自分で後悔しない道を選べばいい』

「……………こんなこと、か」

これまでの自分の行動の結果を、そうやって貶せるくらいにはなつたみたいだ。

そのことが、どことなく嬉しくなってしまう。

「ンガアアアア!!!」

ボクが嬉しさを噛み締めている間に、聞き覚えのある声がボクの耳に届く。

今度はUndyneが叫びながら部屋の中へと入ってきた。

「Asgore! ニンゲン! お互い争うことはない!!!」

ハッキリと自分の正義を主張する、Undyneらしい豪快な入り方だ。

「誰でも友達同士になれるんだ、なんならあたしが……!! あたしが……」

きつと、戦いを止めようとしてくれたのだろう。けれど戦いなんて起きていないことに気付いてしまったらしく、なんだか語尾が小さくなっていく。

「こんにちは。私はTorielよ。この子のお友達かしら? 初めてまして」

「うん、ああ……?」

急に自己紹介をされたことで混乱が加速したのか、Undyneは曖昧な笑顔を浮かべている。

けれど少し悩んだ後ではあったけれど挨拶にはちゃんと返事を返していた。

そうして一先ず戦いは起きていないと理解したらしく、今度はAsgoreに近寄って何かを聞いたみたいだ。

その言葉を受けてAsgoreがなんだか微妙な表情を浮かべた。

……あまり良くない質問だったみたいだ。

「えーと。とにかく頑張れ、お前さん」

結局なんだか空回りしていたという事に気が付いたのか、勢いを失くしたUndyneがボクにそう声をかけてくれる。

……なんというか、気の抜ける状況だ。

「ね、ねえー!」

変な状況になり始めたことに何となくボクまで微妙な顔をしていると、また後ろから聞き覚えのある声の主が入ってくる。

今度はどうやらAlphysが止めに入ろうとしてくれたらしい。引っ込み思案な彼女が戦いの場に出てきて止めようとするなんて、とつても勇気が必要なことだろう。けれど、それでも来てくれたことが嬉しい。

……何と言うか、こうしてみんなが戦いを止めに来てくれるなんて思ってもみなかった。

もしも、もしも一回目の時にもつと時間がかかっていたら、ボクたちを止める為に来てくれていたのだろうか。

みんなで地上に出る為に一緒に頭を悩ませてくれただろうか。

「よし！ いますぐ闘いを止めるんだ！」

そんなことを考え始めてしまったボクに、また聞き覚えのある声が届く。

今度は赤いスカーフを靡かせるPapyrusがボクたちを止めに来てくれたみたいだ。

「Undyneも手伝ってくれ!!」

Papyrusが元気よく戦いを止めるための準備を進めようとしたところでTorielさんが彼に声をかける。

「こんにちは！」

「あつ！こんにちは、国王陛下！」

……国王陛下？

Asgoreが国王なのだから、Torielさんは違うはずなのだけれど……。

「ちよつと！なあ、ニンゲン……」

Papyrusに呼ばれて近づいてみれば、静かに耳打ちをしてくれた。

「Asgoreは髭を剃ったのか……？ そのうえ……クローンを作ったのか??？」

……？ どういうことだろうか。

AsgoreはAsgoreだし、クローンを作ったなんて話は聞

いたことがない。髭についても……、はつきりと立派なものが残っている。

……???

『……キミ、時々察しがいいのか悪いのかよくわかんなくなるよね』
……?

ボクの頭の中を疑問符が支配していると、今度はボクの真後ろに唐突に気配が現れる。

……この感覚にも覚えがある。

「ようお前達……何かあったか?」

いつかの時の焼き増しのようにボクの後ろに立って見せた彼はニヤニヤと笑いながらこの混沌カオスとした空間を眺めている。

……個性豊かなMonster達が集まって、なんだか本当に収集が付きづらくなってきた。

そんなこと思っている間にもSansとTorielさんは知り合いだったらしく、話がはずんでいる。

それを見ているAsgoreが悲しそうで、UndyneとAlphysはそれを慰めようとして……。

さらにはMetatonまでやってきて、さらに混沌は加速していく。

「……本当に、收拾がつきそうにないね」

『顔、笑ってるよ』

「……なんだか、嬉しくって」

いつの間にかこうして知り合ったみんなが集まって、笑いあつて……。

当たり前のことであるはずなのに、それがとっても嬉しい。

「ね、ねえ、そう言えば」

……? 唐突にAlphysが声をあげる。

何か、気になったことでもあったのだろうか。

「Papyrus……あなたが皆をここに呼び寄せたの、よね? その、彼女の、ええと、他の皆を。で、その……もし、私が先にここに来ていたら……どうやってみんなを呼んで回るつもりだったの?」

……確かに、そうだ。

これだけタイミングよくみんなが集まるなんて、それこそとんでもない偶然でしか起こらないことだろう。

それこそ、協力者でもない限り。

なんだか嫌な予感がするなかで P a p y r u s が口を開く。

「ああ、それなら……。小さいお花が助けてくれたぞ」

ボクの中にある何かが大の警報を掻き鳴らす。

「小さい……。花ですって？」

ボクの中で警報がこれ以上ないほどに大きく鳴り響く。

——— 何かが、空を切る音がした。

——何かが、空を切る音がした。

誰も彼もが反応することも許されないほどの一瞬。ただその一瞬で先端に手のようなものが付いた太い蔓が皆を縛り上げる。

その蔓は見覚えがあるどこかで見た気がする。

辺りを見回して探すまでもなく、犯人はすぐに表れた。

地面から顔を出す花。

「バーカ。オマエたちがよろしくやってる間に……ニンゲンのソウルをいただいたちゃったもんね！」

ボクたちを嘲笑うその顔は、酷く歪んでいる。

「そして今、そのパワーだけじゃない……オマエのお友達のソウルも、ボクの物となるのさ！」

「Flowey……ッ!!」

歯を食い縛る。

一度陥れられて、そしてその存在を忘れていたボクが言えたことじゃない。

「へへへ……一番面白いのは何かわかるかい？」

Floweyが嗤う。

今の今までこれでいいって思っていたボクを。警戒も何もせずにとだ笑っていただけのボクを。

「全部オマエのせいだってことさ」

言葉がボクを殴りつける。

「皆にオマエを愛させたせいなんだよ」

そんなことはないって言っただけやらない。

「皆の話に耳を貸して……応援したり……心配したり……」
けれど、それも事実の一面だ。

……否定することは、できない。

「そうもしなければ、コイツらはここには来なかつただろうからね」

Floweyは、ボクのケツイを折ろうとしている。

——ボクの中で感情が暴れ出す。

……いや、落ち着け。まだ抑えるんだ。

「オマエには……！ 何が何でもここにいてもらうからね！」

無数の蔓がボクを押さえつける。そうして逃げ道を失ったボクに向けてFloweyは魔力でできた弾を飛ばしてくる。

ずっと、避けてばかりいたから感じなかった痛みだ。

それがどうした。

Floweyは何度も何度もボクを弾幕で貫く。ボクの体は確かに傷ついていく。

けれど、こんなことじゃボクのケツイは折れはしない。

はつきりと、Floweyを見据え続ける。迫りくる弾丸なんて無視して、じつと。

そしてボクの命を奪うのだろう弾丸が迫って……。

見覚えのある炎が弾幕を跳ね退けた。

「えっ？」

Floweyが困惑したような声をあげる。

「恐れないで、我が子よ……」

声のした方を見てみればTorielさんがボクを優しく見つめていた。

「どんなことが起こっても……私たちはいつでもあなたのことを守るから！」

それは、Torielさんのニンゲンの子供を守るっていう、優しさの表れだった。

Floweyの弾丸が迫る。

今度は大きな骨と槍が防ぐ。

「そうだぞ、ニンゲン！ お前なら勝てる!!」

「なあー、ニンゲン！ あたしを超えた貴様ならば、何だって出来る筈だろ！」

PapyrusとUndyneが、ボクを真っ直ぐ見つめる。

「オレ様はお前を信じる、だから……お前もお前を信じろ!!」

「くよくよすんな！ あたしたちがどこまでもついていくぞ!!」

PapyrusとUndyneが、ボクの背中を押してくれる。

「ん？ オマエ、コイツをまだ倒してないのか？」

Sansがいつも通り余裕そうに笑っている。

「おいおい、こんなやつがオマエに敵うはずないぜ」

Sansからの、確かな信頼を感じることができる言葉だ。

段々と、ボクの中にある想いも大きくなっていく。

ボクの様子に気付いたFloweyがまた弾幕を飛ばす。

今度は雷と炎がそれを防いだ。

「科学的には、この状況であなたが勝つのは不可能だけど……」

Alphysが、笑う。そして叫ぶ。

「で、でも……絶対に、あなたならできるってわかるの!!」

Alphysの確かな本心がボクに伝わってくる。

「ニンゲンよ、ニンゲンとモンスターの未来の為に……!」

Asoreが、ボクに語り掛ける。

「ケツイを抱き続けるんだ!!」

みんなの想いが、ボクに伝わって……そして、ボクを満たしていく。

そんなボクたちを見ていたFloweyの顔が歪む。

けれど、彼らだけじゃない。ボクがこれまでに出会ったみんなが、

この場に現れてはボクに想いを託してくれる。

改めて、ボクの中を……。

ボク一人だけのものじゃない。みんなと同じ『^{ケツイ}想い』を抱く。

「そんなバカな!! こんなことあり得ない……!!」

Floweyが動揺して声を震わせている。

すべてがキミの想定通りになんて行くもんか。そう笑ってやる。

「オマエ………オマエらが……!」

「——そこまでバカだったなんてな」

顔を上げたFloweyの顔は凶悪なものだった。

「本当ならここにいるMonster達のソウルを奪って、ニンゲンのソウルの代わりにするつもりだったんだけど……」

不穏な空気が辺りを満たす。

「———そういえば、そこに七つ目があったよねえ？」

Floweyがボクの胸の中を見通す。そこにはVictimがいる。

ニンゲンのソウルが、ある。

「キミの持つあのニンゲンのソウル、ボクが貰うよ!!!」

Floweyのその叫び声が聞こえて、急に体を引っ張られる。

——いや、違う。引っ張られているのは体じゃない。Victimのそれと一緒に、ボクのソウルまで引っ張られているんだ。

持っていていかれてたまるものかと対抗する。けれどボクが踏ん張ればその分Victimが持っていていかれそうになってしまう。

『……なんだろう、誰かの為に頑張ろうとするかな』

Victimが、ボクの目の前である時の見覚えのある顔をする。止めてくれと言おうとしても、言葉を口にするだけの余裕がない。

『じゃあね、楽しかったよ——』

すると、Victimがボクの中から抜け出してしまう。

途端にボクにかかっていた力が抜けて、ボクの中から飛び出たソウルがFloweyに吸収される。

そして、途端にボクらの視界を闇が閉ざした。

闇の中で、見覚えのない影が見える。

影の主が振り返る。そこにいるのはきつと——

「ぼくだよ、君の一番の友達——」

閃光が迸る。

「ASRIEL DREEMURRさ!!」

閃光の先にいるのは七つのソウルを取り込んで【神】となった存在。

Floweyの蔭から解放されたTorielさんとAsgoreが唾然としている。

目の前で人間のソウルを取り込んだ存在が自分の息子の名前を呼んだんだ、きつとそれも仕方ないのだろう。

けれど、今日の前にいるMonsterはボクの友達を取り込ん

で、利用する存在だ。

……。

……。

……。

ふざけるな

ふざけるな

手に持っている木の枝を強く握り込む。ボクの視界が紅く染まる。気が付けば強く、強く一步を踏み出して目一杯跳んで A s r i e l へと拳を振るおうとしていた。

あと一瞬、あと一瞬あれば完全に拳は当たる。そのはずだったのに A s r i e l は嫌に余裕そうな表情をしていた。

「——ッ!!」

手が何かに弾かれる。殴りつけたはずの A s r i e l には拳は届かず、見えない何かによつてボクの拳は弾かれてしまう。

そして無防備になってしまったボクに向けて星のような魔力弾が迫って——

「急に飛び出したら危ないぞニンゲン!!」

襲ってくるダメージを覚悟して目を瞑ったら突如ボクにかかる重力が大きくなった。地面に向けて引つ張られるボクのすぐ上を星が通り抜けるのを感じる。

地面に叩きつけられてから思い出す。これは P a p y r u s のブルーアタックだ。……どうやら、助けられたらしい。

しかしそう言ってもいられない。目の前に迫っていた弾は避けたが、さらにいくつもの弾が空から降ってきたのだ。

「ハッ！ こんなぬるい攻撃で私に傷をつけられると思うなよ!!」

「ふわあ。なんだ、随分と滑稽コッケイな弾幕だな」

U n d y n e は自慢の槍で迫りくる星を砕いている。S a n s は随分と余裕そうに攻撃を避けている。

皆の方を見て一瞬気が緩んだせいか、一つ弾を避け損ねて当たってしまう。けれど大したダメージじゃない。

……いや、むしろ自分に喝を入れるためにも丁度良かったかもしれない。

怒っているだけじゃダメなんだ。

確かに許せない。けれど怒るだけじゃダメだ。もつと、もつと冷静にしないとダメだ。怒りにだけ身を任せていたら、きつとVictimを助けられないから。

「アハハ！ ムダムダ、君たちの攻撃なんてボクには届かないよ!!」
隙を見て飛んでいくみんなの魔法もAsrielに届く前に弾かれてしまう。どうやらバリアみたいなのを張っているらしい。

……まずは、あのバリアをなんとかしないといけない。

——— だったら。

「そんなバリアの中に居なきゃ何もできないんだ。カミサマなんて言っても随分弱虫なんだね」

まずは『行動』^{A.C.T}してみよう。何事もまずはそれからだ。

「ボクは弱くなんてない!!! だってボクはカミサマなんだから!!!」

Asrielは酷く傷ついたのか怒りだしている。

……バリアも、無くなっていているらしい。最初から大当たりだ。

「———おいニンゲン、急に落ちるがアンタ骨太だから大丈夫だろう？」
急にSansが確認する。一体何が、なんて思う前にもうボクは落ちていた。ただし、真横に。

重力の向きが変わったのかボクは地面に落ちることなく横向きに飛んでいく。どうやら、これがSansの魔法みたいだ。

「そ、それなら……私だって!!」

Alphysの声が聞こえて、気が付けばボクの携帯電話がいつかのように形を変えて銃へと変化する。

……ボクに向けて星が降ってくる。けれど、この銃があればきつと撃ち碎ける。

「さあ！ 進みなさい、我が子よ！」

「もう一度、ケツイを抱くんのだ！」

「最後の最後にこんなショーが待ってるなんて、本当に最高だよダーリン!!」

Torielがボクの背中を押ししてくれる。Asgoreはボクに道標を示してくれた。

Metatonがハイテンションに声をあげながらも道すがら

に出会ったMonster達を守っていた。

もう一度、拳を強く握り込む。

今度は最初の時と違ってボクの渾身の想いを込めて。ボクの知っている皆を、助けるために。

「あああああああ!!」

「ボクは、助けるんだ!!」

Asrielもまた拳を握る。けれど、ボクの方が一瞬速い。

そう思っただけで突き出した拳は、Asrielにダメージを与えることはなかった。

さっきのバリアみたいに、物理的な壁があるわけじゃない。もっと絶対的な壁がある。

そんなことを感じている間にAsrielの拳がボクを大きく弾き飛ばす。

……攻撃力は、それほど高いわけじゃない。けれど何度も受けるわけにはいかない。

ともかく、『攻撃』^{FIGHT}するだけじゃ何にもならなそうだ。

もっと、別の手段を考えなきゃいけない。

——でも、どうやって？

攻撃は通じない。話すにしても、あの様子じゃ何にもなりそうにない。

もっと、もっともつと別の方法があるはずだ。

けれどそれは今じゃない。漠然とそんな感覚がボクを襲う。……

今は、耐えることしかできなさそうだ。

耐えることを決めて、ケツイを抱く。

「あれ？もしかしてもう諦めちゃった？」

Asrielが両手に大きな剣を握る。そして振るわれるそれになんとか避ける。

準備と攻撃の間がない分、避けにくいけれどまだ集中していればなんとかなる。

まだ、違う。もう一度ケツイを重ねて抱く。

「まだまだ始まったばかりだよ!!」

Asriellが今度は腕を振るう。するとボクの目の前を雷が駆け抜けた。

……今度の攻撃は、また一段と早い。

「ンガアアアア!!! ニンゲン、これを使え!!」

Undyneが叫んで、何かをボクに向けて投げる。

思っていたよりも勢いをつけて飛んでくるそれをなんとか掴んでみれば、いつかUndyneから闘いを挑まれた時のように攻撃を防ぐための槍がボクの手になまっていった。

「ダーリン、雷の飛んでくる方向を言うよ!」

Metatonがボクに教えてくれる。その方向から飛んでくる雷を槍で防ぐ。

一度、間違えてしまった時には踏みしめている地面から生えるように伸びた骨が防いでくれた。

「はあ、あんまり戦うことは趣味じゃないんだがな……」

そんなことを言いながらもSansがボクのサポートをしてくれる。

「あら、我が子そんなふてくされてたら腐骨になっちゃうわよ?」

「そりゃ怖い。だったら守るコツでも教えて欲しいね」

「あらあら」

「へへへへ」

「本当に今日は最低な日だ!!!」

……何と言うか、まるでさっきの通りだ。

みんなで一つの目標に向かって、進もうとしている。みんなで笑い合って、話し合って……。

「その集団!! 戦いに集中しろ!!!」

「……わたしだってUndyneとお話したいのに」

「ちよつと! いい加減参加してくれないとツライんだけど!!」

こういうのも変だけど、いつまでもこうして居られたら、なんて思った瞬間だった。

「——はあ、もういい。もう全部終わりにしてあげるよ」

唐突にAsriellがそう言って、膨大な魔力があたりに満ちる。

Asrielのいる場所に向けてすべてが吸い込まれていく。その中には魔力弾まで流れてきて、避けきるのはとてもじゃないけど出来そうにない。

けれど、それは一人であつたらだ。

「はあ……トンだ厄介事だよな」

「兄ちゃん!!!」

SansとPapyrusが目に合わせて、少しするとSansがめんどくさそうに首を縦に振る。

そして二人が声を合わせる。

「ガスターブラスター!!!」

二人の前に人のものではない、何かの頭蓋骨が現れて、口を開く。するとその口からビーム状の魔力が発射されて、迫ってきていたAsrielの魔力弾を弾いてしまう。

なんとというか、すごい。さすが兄弟とでも言うべきか、息ピッタリだ。

「おいニンゲン、ボーンと骨休めなんてしてる暇はないみたいだぜ?」

「――へ?」

目の前を見れば、変わらずにAsrielがそこにいた。

あの攻撃をしのいだことには驚いているみたいだけど、まだ全力じゃないってそう言ってくる。

そして、また大きく頭がアラートを鳴らす。するとAsrielの姿がブレて――

「これが、本物の『神』さ!!!」

姿を大きく変えたAsrielが、ボクたちの行く手を阻む。

ソウルを取り込み、その力を吸収することで本当の『神』となった存在がボクたちの前に立ちふさがる。

絶対的な力の差を感じさせるその姿は、ボクたちに戦いを諦めることを勧めてくる。

「諦めるわけには、行かないんだ……！」

「本当に諦めが悪いなあ……。そんな意地を張っても無駄だつてことがわからないの？」

やれやれと呆れたように目の前の『神』がボクたちを嘲笑う。

けれど、いくら嘲笑われようともボクは……ボクたちは絶対に諦めたりなんてしない。

だって手を伸ばせば届くはずなんだ。届くはずの手を引つ込めるなんて、ボクにはそんなことできやしないんだ。だから、諦めない。

「ええ、こんな困難は乗り越えてしましましょう、我が子よ」

「なに、心配することはないさ。子供を守るくらいのことではできるからね」

TorielとAsgoreがボクを心配しながらも、背中を押ししてくれる。

「そうだぞ、ニンゲン！ オレサマたちを信じて突き進め！」

「なんせ私たちがあんな奴に負けるはずがないからな!!」

PapyrusとUndyneがボクに勇気をくれる。

「わ、私だつてあなたなら大丈夫つて信じてるわよ！」

Alphysが珍しくジツと目を合わせてそう言ってくれる。

「大丈夫、ダーリンならいけるよ！」

Metatonがボクに自信を分けてくれる。

「へへ……なんだ、オマエさんはこの程度で諦めるような奴だったのか?」

Sansがその水色と黄色に輝く瞳をボクに向ける。

……知っている。忍耐と、正義の色。

それがきつとSans自信を表しているのだろう。

みんながそれぞれ心の中に秘めている想い^{ケツイ}
大丈夫、きつとこの場にいる皆がの力が合わされば勝てない相手な
んていない。

確かにボクたちには力がないかもしれない。けれど、希望ならばあ
る。

希望があるんだから、ボクたちは諦めないで挑戦し続けることがで
きる。

この希望こそが、『Deter^ケmination^ツ』の原点。

さあ、ケツイを抱こう。大丈夫、ボクたちはきつと勝てるから。

「あーあ、なんで理解できないかな……。ボクがいる以上、キミは何も
できやしないのに」

「ボクが何もできないかどうかは、キミが決めることじゃない。ボク
は、もう決めたんだって何回も言ったじゃないか」

「なら見せてみなよ。キミのその決めたって言う行動を」

手に持っている木の枝をより強く握り込む。

みんなも、それぞれ武器となるものを構える。

きつと、これが最後の戦いだ。ボクの中で根拠のない確信が湧き出
てくる。これが、終わりだって。

ボクたちがAsrielに向けて攻撃を始める。

けれど『神』であるAsrielにはどんな攻撃も届いてはくれない。
逆に『神』であるAsrielの攻撃は段々と激しくなっていて、ボクたちにイタズラに傷が増えていく。

「う、ぐ……」

この場にいるみんなの中で、一番最初に限界が来たのはボクだっ
た。ボクが誰よりも弱くて、一番最初に倒れてしまった。

そして倒れたボクに向けて『神』であるAsrielの攻撃が向け
られる。他の皆が庇おうと走っている姿が見えるけれど、とても間に
合う距離じゃない。

Sansだって、もう疲れているのかあの『近^{Short}道^{Cut}』は使え無さそ
うだ。

Asrielの攻撃が当たって、ボクの中でソウルが壊れていくの

を感じる。

どうしようもなく力が抜けて、『ボク』が体から離れていく。みんなの顔が曇っていく。泣き出してしまいそうな顔をしているのも見えている。

無力なボクは、ただその様子を眺めることしかできなくて――

「そんなの、お断りだ」

この程度で死ぬるはずがない。

この程度で死んでなんかいられない!!!

みんなを助けるって決めたんだ。絶対にあきらめたりなんかするもんか。

「なっ!? なんでそのじょうたいで生きていられ――」

Asrielが狼狽える。そんなAsrielに向けて、ボクの握っている木の棒が当たる。

けれど、やっぱりダメージはなさそうだ。

「なんで皆諦めないんだよ。これだけ絶対的な力の差があるのになんで!!」

Asrielが思い通りにいかない事にいら立ちを覚えたのか、ボクたちに向けて叫ぶ。

「なんで? そりゃあ決まってるだろうが」

Sansが『神』であるAsrielをバカにする。

「ああ、決まっている!」

Undyneが自信満々に叫ぶ。

「ええ、決まっているわね」

Torielさんは確信を持っているのか、余裕そうに笑う。

「そりゃあ、このニンゲンはそう言う奴だからな!!!」

最後に、Papyrusが自信たっぷりにもボクの事をそう言い表す。

そう言う奴。まあ、結局のところそうなんだろう。ボクは誰かの事を諦めることができなくて、だからこうして諦めることもなく挑戦し続けている。

「うん、ボクはそう言う奴なんだ。だから、救ってみせるよ」

「キミに誰かを救えるはずがない!!」

A s r i e l がボクを否定する。けれど、もう恐れたりなんかしない。

ボクはA s r i e l の中にいるV i c t i m に手を伸ばす。きつと、この手が届けばボクは彼らを救えるはずだから。

何度でも、何度でも手を伸ばす。

「――掴んだ」

「は？ 一体何を――!?!」

A s r i e l が大きく狼狽える。きつと、今頃取り込んだはずのソウルたちがあばれ始めたことに驚いているんだろう。

かつてボクに力を貸してくれたあの人たちは、決してボクを忘れてなんかいなかった。

あの人たちはまた、ボクに力を貸してくれた。今度は漠然とした力の貸し方じゃない。V i c t i m を救うために。ただ一人の為だけに向けて。

あの人たちがボクの為に開けてくれた道を進む。その先にはV i c t i m がいる。

そして、見つけた。

V i c t i m は黒く、暗い世界のなかで人影が一つ。背中を丸めていた。

黒く、暗い世界。

何もなく、ただの闇が広がるだけの世界。

そのなかでVictimは背中を丸めて座っていた。

ただ一人だけ、色を持って。

「……………」

泣いているわけでもなく、何もせずにただそこに座っているVictimは何もしていなかった。

Asrielに協力しているわけでも、何でもなくただそこにいた。

だから、横に座ってみる。そうしていると、少ししてから、Victimがボクを見た。

『……………なんで、ここにきてるのさ』

「ボクが勝手に来たと思って思ったから。だから来たんだよ」

『ごんな、何もないところに?』

「うん。キミを助けたくて、こんなところにまで来ちゃった」

ぽつりぽつりと言葉を交わす。

けれどVictimはやはり何もしていない。Asrielが勝手にVictimの中にある『想い』の力を使っているだけ。

だから、ボクだって勝手に助け出してやる。

「*Determinatiön」

——手を差し伸べる。

手を取られることはない。ただ静かに首を振られてしまう。

——楽しく話をしようと、正面に立って言葉をかける。

話は弾まない。それは望まれてはいないようだ。

——もつと、たくさんいろいろと試してみる。

どれもこれも、Victimの心を動かすには足りない。

——もう一度、何もせずに時間を過ごしてみた。

すると、何かが見えてくる。

黒しかなかった空間に、別のものが現れ始める。

ただ一人で何もせずにそこにいただけの誰か。
何もせず、何も考えず。そんなところに、声が聞こえてきた誰かの影。

声は、必要としてくれた。

声は、意味があると喋ってくれた。

声は、私を呼んでくれた。

意味のなかった誰かに、答えをくれた。

だから、そのために生きることにした。ただそれだけの事。

意味のない時間を過ごしていたけれど、意味があると喋ってくれる存在がいた。だからそのために生きる。

そうして言われるがままの行動をしてきた。ただ言われたから、そうすれば喜んでくれるから。

ただそれだけを理由にして、動いてきた。自分の事なんて微塵も考えずに、ただその存在の為だけに自分を使い潰そうとしていた。

それがその存在の喜びになるのならっていう一心で。

——そんなのは間違っている。

そう叫びたかった。声高らかに言い切ってやりたかった。けれど、それは許されない。それは本当にしちやいけな行動だ。

その道を歩んできたんだ。歩んできた道を否定することなんてできやしない。否定したところで、過去は変えることなんてできない。

それこそ、”世界の針を戻す”なんて馬鹿げたことでもしない限り。

何も言うことができない。言わないんじゃない。言えないんだ。

口を開いたところで、言うべき言葉が見当たらない。影の主が歩んできた道は、ボクの想像を超えていた。

何も、できなかつた。

何かを選ぶことができず、ただそこに突っ立っていた。

こうしている間にも、時間は過ぎ去っていく。けれど、目の前には選択肢なんて見えない。

何も、思い浮かばないんだ。

『——』
ただ、うつ向いて何もせずにいるボクの耳に、あの子の声が聞こえ

た。

何もせず、何もできない無力なボクだけれど聞くことだけではでき
た。あの子の思い出を聞ける。見える。

そこにいたのはボクだった。

名前を知って、その体から離れていくソウルを見て、つい体が動い
てしまったボク。

何度も何度も忠告されたのに、それを聞かずに意地を通したせいで
呆れたようなため息を吐かれてしまったボク。

そんなボクが、鮮明に映っていた。

形くらいしか映っていたかったこれまでの人影とはまるで違って、
はつきりと映っていた。

ボクの言葉が、ボクの行動が。

『——て』

もう一度、声が聞こえた。今度は、さつきよりもはつきりとした声
が。

『——けて』

あの子は……Victimはボクをしっかりと覚えていてくれた。
ボクという存在が、しっかりとこうして形に残るほどにはつきり
と、覚えていてくれたんだ。

大丈夫、ボクはもう迷わない。周りがどういおうが関係なんてな
い。

——ボクはただ、想ったことを貫き通すだけなんだから。

もう一度、改めて想いを、“決意”を固める。

純粹な、ボクだけの。ボクの決意を。

『——助けて』

「うん、助けるよ。絶対に——」

選択肢は相変わらず見えてこない。

けれど、そんなことは関係ない。

見えてこないのなら、創ってしまえばいい。

そう。自分で作ればいいんだ。

新しい選択肢を。

「
S
A
V
E
」

ボクの中で確かに生まれたその選択肢はきつとこの”世界”にはなかつたもの。

けれどボクは確かにそれを作り出した。他でもない、ボク自身の決意を元に。

誰かに言われただとか、義務感だとかなんて関係ない。

なんでもなく、「ボクが助けたいから」たったそれだけの自己満足の為。

そのために、産み出した選択肢。

「——けるんだ」

選ぶ。その選択肢を。

ボクの決意を。一度では何も変えることができない。

だったら、なんども重ねればいい。

何度でもボクの決意を叩きつけてやればいい。

「——助けるんだ!!」

腕を掴んで、無理やり引つ張り上げる。そうして、勝手に進んで外に出てしまう。

本当に、無理やりだ。相手の事なんて何も考えちゃいない。

——けれどそれが『ニンゲン』だろう？

いつだって自分勝手に考えて、行動して。

——それで後悔したってかまわない。

だってそれが——

——なぜならそれが

『決意』なのだから!!

『……ありがとう』

聞きなれた声が聞こえてくる頃には、また黒い世界へと戻ってきていた。

何もなく、けれど確かに『想い』のあるその場所へ。神となったAsriel Dreamurrの持つ『想い』が結晶化したその世界。光を失った彼が、未来へと進むための道。彼の見ている世界そのも

の。

ボクがさつきまでいた光あふれる過去とは違う、何も見えない未来へ進むための道。

「うん、その言葉が聞いて良かったよ」

中身を理解したから、この場所にいるという事実がボクに重くのしかかる。

けれどそんなことは今更関係なんてないさ。

これは、ボクの『決意』とAsrielの『想い』のぶつかり合う場所。

ボクは助けたい存在の為に。

Asrielは全てをやり直すために。

向き先は違う。けれど、本質的にはAsrielだってボクと同じだ。ボクと同じで、ただ自分の『目的』の為にこの場に立っている。だからこそ。

そんなただの意地をぶつけ合ってるボクらを支えてくれる存在の有無は、大きな差になる。

ボクはあの時みたいにな、この体一つってわけじゃない。

今のボクには、たくさんの友達がいる。その友達が協力してくれるんだ。

無理やり押さえつけて、自分に従うようにしたAsrielとは違う。

「みんな、頑張ろう!!」

ボクの友達はそれぞれの言葉で返してくれる。みんながみんな、攻撃の準備をして構える。

けれどこれはもう闘いじゃない。

お互いが自分の想いを押し通そうとするただの喧嘩だ。

ボクは振り返らず、そこにいるってわかってるその子に向けてもう一度声をかける。

「サポートお願いね、Victim」

『無理矢理連れ出してそれとは中々酷いとおもわない?』

Victimは静かに息を吐き出す。けれど、すぐにクスリと笑

う。

うん、やっぱりこうじゃなきゃなんだか落ち着かない。

——さあ、見せつけてやろう。

ボクたちの『決意』を。

——神を気取るあそこの誰かさんに向けて。

手にした木の枝を握り込む。ボクの周りにはたくさんの友達がいる。

闘いなんかじゃない、意地のぶつけ合い。

互いに認めることが、諦めることができないから二人して馬鹿みたいに殴る。

……もつとも、この場にいるのは二人なんかじゃないけれど。

最初に感じていた圧倒的な差はもう感じない。

ボクも、Asrielも。結局のところは一緒だったんだ。だから、もう何も関係なんてない。

——ただ、できることなら。

みんなを助きたい。

——Asrielも含めた、皆を。

Asrielが魔力で作られた剣を構える。

ボクはその剣をギリギリで躲す。

そして拳で殴りこもうとして、Sansによって引き戻される。

「Sans、急に何するの!？」

「おいおい、Monsterの体つてのはニンゲンの持つ『ケツイ』の力に弱いんだ。それなのにそんな『ケツイ』にあふれた拳で殴ってみろ。一瞬で”骨”抜きにされちまうっての」

「……あ、ごめん」

『はあ……。抜けてるといふか、なんといふか……。』

アハハと誤魔化すように笑ってみればVictimとSansのため息が重なる。

……なんといふか仲がいいな。

でも、行ける。

「おいニンゲン、そんなところで止まってるんじゃない!」

「そうだそうだ! 兄ちゃんもそんなところで突っ立ってたらやられちゃうよ!」

UndyneとPapyrusがボクに向けて苦言を突きつける。

そりやあ確かに立ち止まっていはいたけれども……。まあいいや。気を取り直して、と。

「キミたちみたいな弱いやつらに、ボクが負けるはずがない!!」

「ハハハ、弱い、弱い……。か。確かにそうかもしれないね」

「あら、意外とあっさり認めるのね、Dreemurさん」

「うん、確かに個々の力は弱いかもしれないからね。けれど」

Asrielのその言葉、ボクは否定する。

みんなは弱くなんてない。それは意図せずとも戦うことになってしまったボクがよく知っている。

そしてそんなみんなが同じ目的の為に手を組むんだ。そんなの、強いに決まってる。

「——みんなで手を取り合うなら、どうかな」

ボクの想いと似たことをAsgoreが宣言する。

神となっていたAsrielも、Asgoreのオーラに圧倒されて、一瞬気圧される。

「クソツ、クソツ、クソツ！」

「さあ、反撃だ!!」

みんなが一斉に自分の魔法を飛ばす。炎が、光線が、電気が、槍が、骨が。全部バラバラのはずなのに一つに纏まって飛んでいく。

さすがの皆の想いを込めた一撃は確かにAsrielに届いた。けれど、それは決定的なダメージではなかった。

決定的なダメージではなかったが、確かに神に傷をつけた。

うん、皆いつも通りだ。いつも通り、自分の想いを魔法に載せている。

何も知らなかった時にはそんなことを考える間もなく、ただの脅威としか映っていなかった。

けれどももう知っている。みんなの想いを。だからこそ、もう怖くはない。なぜならそれは、とても優しい魔法なのだから。

——このままでいいのか？

良いはずがない。

このままボクだけ何もしないで、皆に任せっきりなんて許せるはず

がない。

だから、こうするんだ。

ボクの中で作られた新しいシステムル。その輝きルがあたりに満ちる。

「なんだよ、それ……」

「ボクの『決意』だよ」

「そんなもの、ボクは知らない!!」

Asrielが現実を否定するように叫ぶ。しかしボクには関係ない。

「知らないの?」

「知らない、知らない!! そんなもの、この世界にはなかったはずだ!」

「——想いは、時として現実を凌駕するんだよ」

ボクのソレじゃない言葉がボクの口から飛び出していく。

けれど、なにも不思議とは思わない。だって、その子はずっといたから。

なんとなく、そう感じる。

「——さあ、決着だ。Asriel」

「なんで、何で諦めないのさ! なんでそんなものを創り出してまで抵抗しようとするの!!」

「——ハ、そんなの、決まっているだろう。」

そんなの、決まっている。

「——それがコイツの」

それがボクの——

『Determination決意』なのさ。

そして、そのボクの決意は今、極点に到達した。

この地下世界の皆を助ける為に。世界そのものを『上書き』していく。

ボクの決意が、塗り替えていく。このAsrielの世界を、ボクの世界に。

——目を開けばそこには輝かしい未来がある。

七色に淡く光る、光にあふれた世界。

希望ばかり見ている理想主義者じゃないと思うけれど、こうなってしまうたらしい。

「なんだよ、これ。神であるボクの力を上回ったっていうの!? ただのニンゲンが!？」

「……こいつはたまげたな。どうやらソイツは平ボーンってわけじゃなかったみたいだ」

「なんでだよ！ なんでみんなボクを勝たせてくれないのさ!! ボクはただ、ボクの親友と一緒に居たいだけのなのに!」

Asrielが大きくわめく。

”ボクは、親友の想いを成し遂げるんだ”って、大きな声で。

「キミの親友は、自分の目的を誰かに背負わせるなんてしないよ」

「ボクの親友はニンゲンを憎んでた。だからボクが代わりに殺すんだ!」

ボクの中の誰かが力なくAsrielの名前を呟く。

「——もう、終わりにしよう」

誰かが『ケツイ』する。

ボクが『決意』を重ねる。

みんなが『想い』を紡ぐ。

もう一度、ボクの中にあるその選択肢が大きく輝く。

Asrielの攻撃を少し受けながら、ボクの中でその選択肢が再び輝いた。

輝いて、光に吞まれて。

一瞬だけ。

一瞬だけ、緑と黄色のボーダーシャツを着た子供たちが見えた気がしたけれど、それもすぐに白に吞まれた。

そして、目が覚めるとボクの顔を見覚えのある友達がのぞき込んでいた。

「……終わったんだ」

「いいえ。これからが始まりですよ、我が子よ」

「ああ、そうだね。これから始まるんだ」

「これからオレさまたちの物語がようやく始まるんだ!」

「外の世界、どんなところなのかしら」

「どんな所でも私が守るから安心しろ！」

「——行こうぜ、▲○◆☆。ちようど今から始めるんだ。」地上世界の暮らし」を」

みんながボクを見て、S a n s がボクに手を差し伸べてくれる。

あの時は、皆は居なかつたけれど。それでもあの時とは違って、S a n s はボクをちゃんと見てくれている。

こんどはきつと手にブーブークッションなんて仕込んではいないだろう。だからこそ、ボクはその手袋に包まれた手を握り返した。

なんだかじんわりと登ってくる嬉しさを静かに噛み締める。

『ねえ、一つだけ、お願いがあるの』

「おねがい……う？」

ボクは多分、そのお願いの中身を知っていたと思う。

V i c t i m の『想い』、『R e s o l u t i o n』^{覚悟}に満ちたその眼

を見た気がするし、いつかのどこかで聞いたようなことだったから。

『私は、ここに置いて行って欲しい』

だからボクは、その言葉に素直に、微笑んで返すことができた。

「」

目を覚まして窓から差し込む日の光を浴びながら、ボクはこれまでをふと振り返っていた。

地下世界から地上へとでてきて、ボクはモンスターとニンゲンを繋ぐ架け橋である”親善大使”になった。

御伽話にしか出てこないはずのMonsterがいることにどうしても混乱は産まれていたけれど、ニンゲンはなれる生き物だ。だからこそ、彼らはすぐに慣れてくれた。

きっと、かれらがそもそも友好的だったってことも関係していたんだろうけど。

それに地上に出てからもたくさんのが起こった。

まずは――

「おいおい、オイラ達の生活を支える親善大使サマがこんなところでボーンとしてもいいのかよ。もう時間はコツコツと迫ってきてるぜ?」

「ええ!?! ちょっとSans、なんで言ってくれなかったのさ!」

「言っただよ。言っただがアンタが疲れてたのかずーっと眠りこけてたんだよ」

「どうせ一回言っただけで諦めたんでしょ!?! この怠け骨!!」

「へへへ、お見通しか。だがあの状態のアンタを起こすのに骨が折れるのも事実だぜ」

まずは、想っていた以上に親善大使の仕事が多いという点。

そもそも過去に前例のないことをしようとしているから当たり前なのだけれど、ゼロから基盤を作っていないなかければいけない以上とても忙しくなっている。

とはいっても、これはボクが自分で選んだ道なんだから、このくらのハードワークならまだやり切って見せるっていう『ケツイ』を持っていられる。

「あれ? 今日はお寝坊なニンゲンなのか?」

「ごめんPapyrus、すぐにでなきやだから話はあとでお願い!!」

「ハハハハ、どうやらニンゲンは自分がベッドに骨抜きにされてたせいでご立腹らしい」

「SANS!!!」
兄ちゃん

二人して声を荒げてSansを責め立てる。

本当にこの男……？ は油断ができない。気が付けばそこにいるくせに特に何もせず、怠けてみるばかり。

——らしいと言えば、らしい。

そうかもしれないが、しかしいくら何でも親善大使としての仕事だつてあるこの時に怠けなくてもいいじゃないか。

「仕方ないな。おいニンゲン、こつち来てみろよ。いい近ShortCut道を知つてるんだ」

急に何を、そうは思いながらも彼についていく。

こういう時に手を差し出してくれるんだから、なんだか憎むに憎めない。

——この場合、計算もあるだろうけどな。

……本当に、抜け目がなくてSansらしい。

地上に出て、本当にいろんなことがあった。環境だつてガラリと変わった。

けれど、みんなの根本は変わってなんかいなかった。

変わったことがあるとすれば、二つ。

一つは、ボクの中にいてずっと地下世界を歩いてきたVictimが、今はボクの中にいないってこと。

これはボクだつてそうあることをよしとしたんだから、まあ当然と言えば当然だ。

そしてもう一つ。

地上に暮らすMonsterに新しい仲間が増えたってこと。

そのMonsterの名前は——

「あ、よかった。間に合ったんだね。その骨がいるから安心だとは思ってたけど、とはいえ時間ギリギリだからひやひやしたよ」

ヤギのような顔をした、ボクと同じくらいの背丈をした『取り残されていた少年』。

そう、皆の親友――

「Asriel」

「……なに、急に名前なんて呼んでどうしたの？」

彼はFloweyという花のMonsterにはならなかった。いいや、させてもらえなかったって言うべきかもしれない。

自分は無情な花になってもいいって、そう思っていた彼を止めた存在がいた。

「いや、あれからどうかなって思ってた」

「……うん、大丈夫。あの時とはまた違うけれど、それでもこうしてみんなのことを気遣ってるんだからね」

「Victimは元気？」

「えつと『死んでソウルだけになってるんだから元気も何もない』……だって」

もうわかっただろう。Victimはボクの元を離れた後、自分からAsrielに協力を申し出たらしい。

人の想いを知って、ほんの一瞬だけ救われて。それで満足しようとしていたAsrielを真っ向から否定していた。

それからまあ、半ば自分からFloweyとなりかけていたAsrielに入り込んで、こうして失った想いの代替品になっている……

と言うのが本人の言葉だ。

変わりはした。

いろんなものが変わりはした。

それでも、ボクたちは多分変わらない。

――きつとなんて不確定なものじゃなく、確信を持って言える。”
変わらない”って。

きっと、ボクたちはいつまでもずっと友達のままだ。